

郎路生麻・幹主

川柳雜誌

號 月 二



昭和二年三月一日發行
第三卷第一號
定價每份一角

川柳雜誌
第四卷第一號

川柳雜誌社發行

第 回 川柳大募集

選者藏生路郎氏 △一人一句
官製ハガキ使用の事△大阪市

北區中之島三丁目大阪朝日新聞社內週刊朝日懸賞文藝係宛

▽入賞 第一席參圓(同貳拾圓)第三席同拾圓佳作數十名(薄謝)▽締切二月八日限り▽發表週刊

朝日春季特別號誌上

▽日 時 二月四日午後六時半

▽場所
大阪市南區清水町
停留場西入

端
の
坊

▽兼題「夫婦」三句
▽會費二拾錢

初心者の來會を歡迎す

▽日 二月十二日午後六時より
▽場 阪神沿線鳴尾停留所下車東
半丁 南生路那方

▽批許吟 雜吟持參
▽會費 不 要

感想・評論

阿蘭陀西鶴

これも人の親

川柳家はもさ
苦しむればならぬ

柳書刊行に就て

研究·其他

柳樽
評釋
廿四篇まで

唐柳短解

陶然の種々相

卷一百一十五

川柳家戶籍調

▲募集句

後

後 記

初句會の夜

名地柳埭

表紙畫：柴谷柴舟
題字：小出櫓重

初句會の夜の人々
(寫眞)

編輯室から
路 郎 生

創作

大正天皇を悼み奉る

川柳塔

同
黑木菉豆

檜山千代二

井上
刀三

同
岩崎柳路

德田又柳

西井詢人

同
庄萬よし

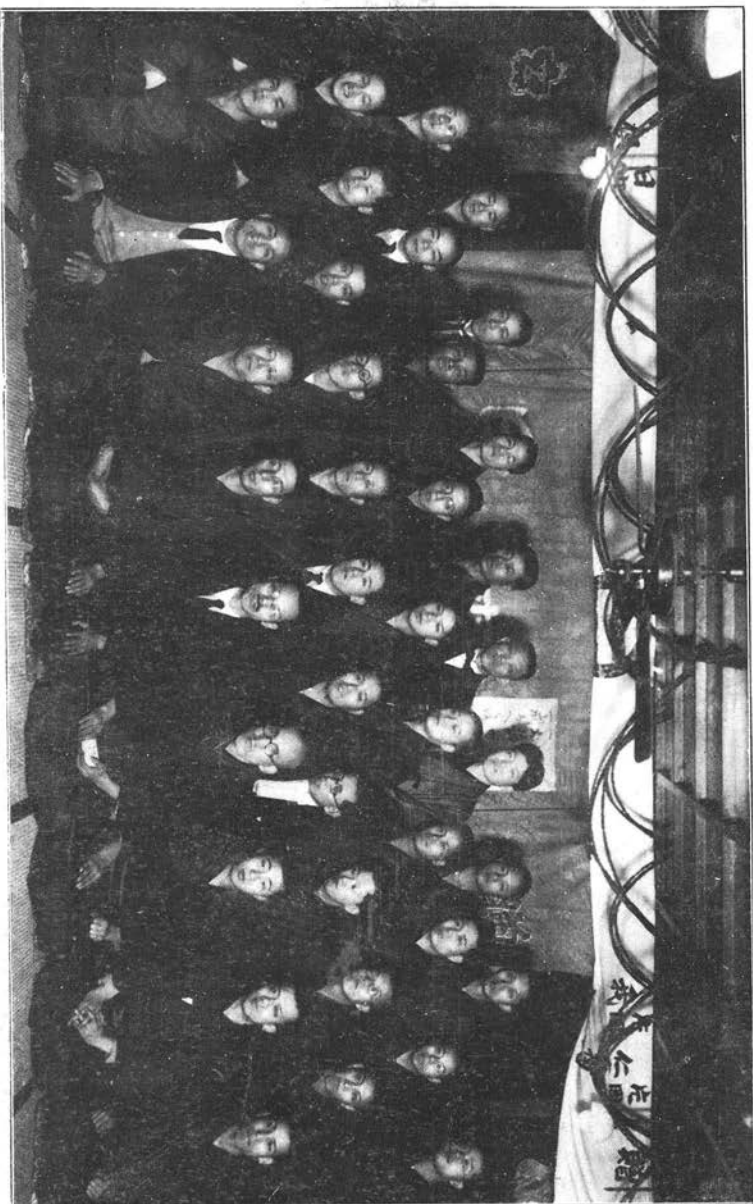
同
西本三笑

橋本二柳子

近作卯尊者家

10

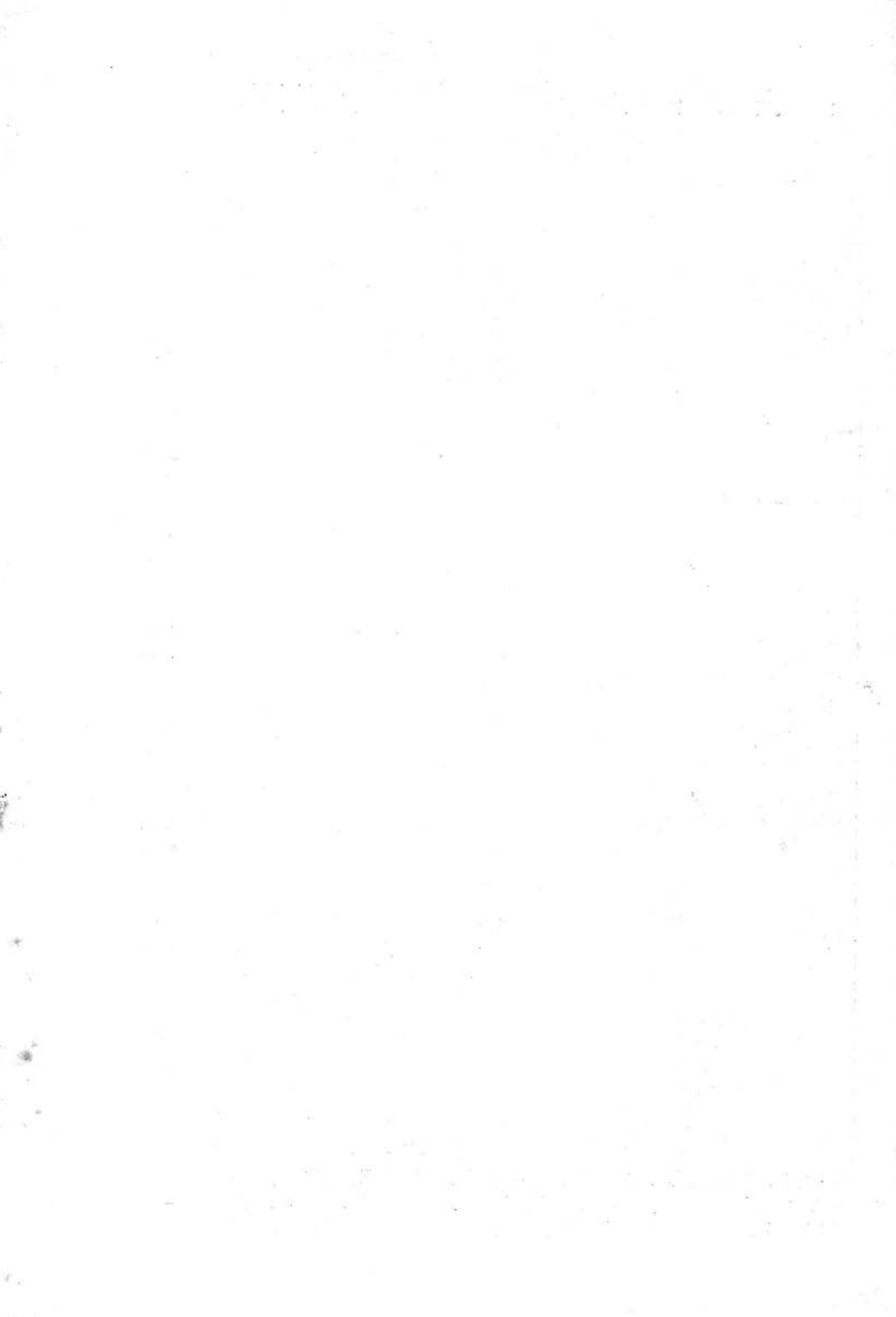
初夜の人々



一写真説明 前列右より、銀燈、香影子、のぼる、柳浦、路郎主幹、松野、萬よし、淵水、飯山、第二列、塚坊、一路、おはる、藤園、ひろし、柳骨、二柳子、醉夢、祇庭、冷笑、鮎美、第三列、彩秋、十字路、翠峰

光眼、鶴三郎、舟々、三斗、助六、佳山、三寒、第四列、川洞、三日家、久眠、文鏡、番外、山雨樓、水鏡、琴香

昭和二年一月七日夜撮影



大正天皇　を悼み奉る

麻　生　路　郎

草莽の臣かなしみの炭をつぐ
謹しんで机の上を片づける
赤子なることをはつきり見せ給ふ

柳 評 釋 樽 廿 四 篇 まで (一)

麻 生 路 郎

(一) 柳 樽

川柳と柳樽とを混同して、柳樽と云へば川柳の別名でもあるかのやうに思つてゐる人達があるが、それは大變な間違ひで、柳樽は諷風柳樽の略稱であつて、川柳集の書名なのである。

柳樽は初代川柳が選んだ前句附の唇指の中から、吳陵軒可有(木綿と號した人)が一句立として句意の解し易く、俗耳に入り易いものばかりを拔萃した川柳集であつて、その初篇は明和二年(西暦一七六五)七月に下谷竹町二丁目の花屋久治郎(管裏と號した人)の手で刊行されたものである。

岡田博士がその著『寛政改革と柳樽の改版』の中で、柳樽は明和二年七月に初篇が出て天保七八年(西暦一八三六)に至る七十一二年の間に、百六十五篇まで刊行せられたものであると述べてゐられるが、今日柳樽の完本を所持してゐる人云へば、おそらく一人もあるまいさへ思はれる位散逸されてゐるのである。

柳樽は明治から大正へかけて幾冊か活字本となつてあらはれたが、その尤も多くを蒐めたものは圖書刊行會から出た俳風柳樽全集(定價七圓)である。しかしこれとても僅に初篇から六十篇までを蒐集したのに過ぎないのであるから全篇の約半数に

も足りないのである。故に俳風柳樽全集は全く全集の名にそむくものだ云はれてゐるが、柳樽の柳樽たる佳調を傳へてゐるものは初代川柳の選んだ二十四篇までであるから、特殊の古句研究者でない限りは、諷風柳樽全集の一冊を讀破することによつて柳樽の如何なるものであるかを知るには充分であらうと思ふ。私が廿四篇までを一段階として評釋を試みようとするのも斯うした理由からである。由來柳樽の句は玉石同架の甚だしいものであるから特別の研究家でないものにまつては勞して益ない事なのである。そこで私は、初代川柳の選んだ廿四篇までのうちから人情機微に觸れた比較的佳句として推賞するに足るもの、又は句としては多少の論難あるも徳川時代の風俗習慣が巧に描き出されてゐて、讀者の興味を唆るに足ると思ふもののみを抜いて、評釋を試みようと思ふのである。

(二) 初 篇

柳樽の初篇が明和二年七月に刊行されたことは前にも述べたが、その劈頭には編輯者吳陵軒可有の序文が掲げられてゐる。序

さみだれのつれづれに、あそこの隅この棚より、ふるさとの

前句附のすりのものをさがし出し、机のうへに詠むる折ふし、書肆何某來りて此儘に反古になさんとも本意なしといへるにまかせ一句にて句意のわかり安きを舉げて一帳さなしぬなかんづく當世俳風の餘情をむすべる秀吟等あれば、いもせ川柳樽と題す干時明和二酉仲夏淺下の籠吳陵軒可有述と記されてある。

この序文を真正直に、このまゝうけ容れるに吳陵軒可有が、前句附を出して詠めてゐず、出して詠めてゐても書肆がやつて來ず、たまゝやつて來ても此の儘に反古になさんとも本意なしと云はなかつたならば柳樽は遂に生れなかつたのである。この時柳樽が生れたといふことは當然生れるべき機運に達してゐたものが生れたのであると云つてしまへばそれまでであるが、この不可思議な機縁を思ふ時、彼の世界大戰がセルヰキヤの一青年の撃つたピストルの一彈から生れたのと同じ等變らないものと思ふのである。

吳陵軒可有は別號を木棉と云つた。果して如何なる人物であつたかは知るよしもないが、かなり熱心な、かなり忠實な前句附の世話人であつたことだけは知るこゝが出来ゐる。そして彼も又その作句者の一人であつたこと、二代目の吳陵軒があつたこと、は柳樽を通じてうなづかうるのである。彼は柳樽を初篇から廿二篇まで編輯して遂に天明八（西曆一七八八）申年五月廿九日に

雲晴れて誠の空や蟬の聲 木棉居士

の一句を辭世として物故したのである。以上説くところの外に、私はまだ川柳を生んだ前句附について

も、その點者であつた柄井川柳についても少しく書く筈であつたが、あまりくだしくなるのでそれ等については機會ある場合に譲ることとして直ちに初篇の句の評釋に移る事とする。

(三) 初篇の句

五番目は同じ作でも江戸生れ

この句は初篇の第一番目に出てゐる句であるがためであらうがかなり有名な句である。古句研究者の組上に幾度か載つてゐる句ではあるが極つまらない句である、有名な句であること、佳句は全く別であることがわからう。頗る非藝術的な句である。この句を喜ぶのは僅に江戸趣味の通人位なものであらうがそれさへ今は心細くなつてゐる。

句意は武笠山椒氏の『俳風柳樽通釋』から、そのまゝ拜借しておく

『靜觀坊の當世下手談義、八王寺の齋翁といふ老人が、八人の息子たちを前に並べて置いて、御説法をして聞かせる所に「其方たち兄弟八人は、胤腹かはらぬ一腹一生、皆此の聖首羯磨が御作」といふ文句がある。こんな心持で、江戸の六阿彌陀の中他の五阿彌陀は揃つて市外にあるに拘らず、五番目の上野廣小路の常樂院の阿彌陀如來だけが市内にあるのを言つたもの。實は、此の一體だけが江戸で出來たものでは無く、他の五體も一諸に、行基菩薩の手で、同本で刻まれたもので「江戸産れ」は理屈に合はないのである」云々。

いはれを聞けば有難やの口である。詩は説明すべきものではないけれども、斯うも興味索然してはたまらない（つくく）



足並も揃へ新婚驛へ出る
兄弟で炭屋をやつて仲がよし
肩掛けをはすし挨拶直ぐにすみ
縮緬の帯で神主罷り出で
梳髪の頭に黄楊の櫛の巾
隣からその御詠歌を續けて來
月給を知らず子供は無理を言ひ
母の字は小遣帖に見るばかり
走り元蚯蚓ぐらいに聲を出し
さつちを叱かるのか巡查迷うて
皆咲いてしまつた蓮の背が高し
さしあたり遊んでゐる云ふお金
起きてたんだ夜具もつめたし
かちやんご馬車これからの旅に出
いそがしく只妻になり母になり
父病めば正月までないくら
蒸氣船おこつた様に煙を吐き
木版だ切手だなごき閑な人
貞淑な妻有る事を忘れたか
玉の興美やむ様な顔かいな
ドンダリの数を見せ合う無邪氣さよ
袖を替へて朔日の澄んだ空
賣れ残る柿へ一滴二滴雨
鼠捕つて其夜淋しく寝たりけり

五

同同大同同同同大同同同同同廣同同同同同同大同同同同
阪阪島阪

同同大夢子同同同同靜雲同同同同同露斗同同同同同聞路



初雪に女中部屋へも火を入れる
 臨終も知らずに金魚泳いでる
 其足が錢湯に行く足音か
 ボケツトにバット一本腰が折れ
 嘘をつく事を女に教へられ
 少うしは妬いてゐるのが唄に出る
 金ためるばかり見へず暮の廓
 一割が小作一家を春にする
 娘の手氣づかひ母はひきり蒔く
 捨られて又エブロンの日を送り
 二人迄死なして父はぎつゝ老け
 情熱は只色もなく灰さなり
 あらそへば父の力の弱りたり
 狼狽を見せまいとして持つ銚子
 空別荘哀れ露臺に落葉する
 靴音に脅ねる我に強く泣け
 病妹の哀れ頬紅目立つなり
 登記所へ通うばかりに生きてゐる
 刈つて居る床屋を聞いてまでの用
 有難さ疲れを見せず號外屋
 姉様の赤い襦袢が目にしまり
 糸をくるうちにいつしか戀心
 鏡臺の緋のモスリンも新世帯
 孫の取る柿木の下を離れてる

七

同同同神同同同同同同大同同同大同同同徳同同同山同
 同同同戸同同同同同同阪同同同阪同同同島同同同梨

鎌同同柳同同悟同同同白同同同冷同同同銀同同同天同
 月同造郎蝶笑柳花



阿蘭陀西鶴

— 榴花洞漫筆 —

前田雀郎

浮世の義理を缺くに、女房と相談をする手かずもいらぬ獨り身の氣安さには、お元日だといふに、朝から丹前の卿へハイア今年の初日を背中にくけて、うつら／＼と我が書齋の、ゆうべ掛け替へた短冊を讀んでゐる。

この短冊といふのは、これでも一軒、ガタ／＼普請ながらお城を構へたからは、少しは正月らしく改まらねばなるまいと、除夜の鐘と共に床の掛軸を、月並ながら松と鶴のおめでたいものに掛けかへたついで、いつか天金の主人から贈られてあつたのを幸、この部屋飾りとした西鶴の發句である。句は『元日』と題し

君が春や萬さいらく萬歳樂
と一流の洒落た詠み口のようにである。

が、この句、一氣に讀み下して仕舞つてはいけなものである。君が春やまでは平つたく讀んでもいいが、その下の萬さいらくからはチャンと句の傍らに諺が／＼つた胡麻點が打つてあつて、それに従つて一種の抑揚をつくつて讀まないで、この句の氣分が出ぬといふ、いさゝか骨の折れる發句なのである。

御遠慮の春、わけて木枯わたる、代々木の山中では、訪ひ來る人もないつれ／＼に、私はさつきからネグキカツトを詰めては、この厄介な短冊を、出鱈目に節づけて讀みかへしてゐるのである。

然し出鱈目でも、謠ひが／＼つてゐるのであるオウ／＼なぞ、やつてゐるに、いつか春らしく斯ういゝ氣持になつて來るものである。疊の上には肩越しに暖かさうに冬の陽が流れてゐる。

かうして西鶴の句を、謠ひが、りに練りかへしてゐる中に、西鶴、謠曲、この二つの連想から、私はフトこの西鶴に對して「西鶴は謠曲で學問をした男だ」と嘲けりを投げかけた同門の一時軒帷中の言葉を思ひ出した。そして私は今更ながら、談林の吉に於ける俳人としての西鶴の境遇を、しみじみ思ひかへして見た。

延寶三年、その祖西山宗因が、江戸に於いて打つた

されば爰に談林の木あり梅の花

の一句を門出の諷きやして、がて談林は俳壇を風靡した。然しながら談林のこの目覺しき事業は果してこれ宗因一個の力にのみよるものであつたかどうか、談林の一番頭としての、その際に隠れたる西鶴が三兩六臂の大働きは、つひにこの一句の力にも及ばぬものであつたらうか。

西山宗因が談林の旗じるしは、俳諧の革新にあつた。内容、形式共に舊來の法式の總てを破壊して、もつち自由な、清新な短詩の創造を試みやうといふ運動であつた。けれどもこれがリーダーたる宗因自身は、理論家としての存在以上にぎれぎれの實際的な仕事を行つてゐたか、この運動の最も勇敢なる實行家は、實に我が西鶴ではなかつたか。若し談林派に西鶴が無かつたならば、よし談林の認められる時が来るにせよ、こんなに早く世間の視聽をあつめはしなかつたらうとさへ、私は思つてゐる。

二十代にして既に一日獨吟千六百句の大興行をなし（延寶五年五月二十八日、大阪生玉本覺寺に催す）一世を駭したる西鶴、この談林の若武者は、當時俳壇に於いてそれだけの地位に置かれ、待遇をうけてゐたか、前に述べた同門の惟中が罵言に見ても、その大がいは察せられやう。私は當時の俳書をひもく度びに、彼の爲めに一掬の涙なきを得ないのである。

同僚の嘲りをうけるものは、大抵の場合「妬み」か「あなざり」か、この二つに原因する。西鶴の場合は氣の毒にも、實に後者に屬してゐたのである。西鶴が宗因の門に入つたのは、まだ師の宗因が世にあらはれない頃からであつた。西鶴は全く談林の土臺から師と共に築いて來たのである。にも拘らず報ひられなかつた。これほど苦勞を共にして來た西鶴にも拘らず、師宗因は彼が無學の故を以て彼をよるこばなかつた。宗因にまつては西鶴よりも、學問がある同門の惟中の方が可愛い弟子であつた。

何處のお師匠さんも同じことである。生れたまゝの眼をもつて深くものを見極めやうとする者よりは、自分の智識の鏡に照して、一々要領よく仰合して呉れるお弟子の方が可愛い宗因はこゝろに西鶴のやり口を面白く思はなかつたやうである。

既に社中に於いてさへ斯くの如き西鶴である。何で黨派的に對立する貞徳門（松永）の人々が黙つてゐやう。延寶七年、山本西武門の中島隨流はその著書「俳諧破邪顯正」の中で、オラ

ンダ西鶴を彼を罵つた。

このオランダ西鶴なる意味を、ある人は『惡達者』所謂吉利支丹判天連の魔法使ひといふやうに解釋してゐるが、私はこれを同じ吉利支丹でも、異端、つまり俳諧の正道を踏みはづした者といふやうな意味で云つてゐるのではないかと思ひ解してゐる。餘事ながらこの言葉の本當の意味、又はその出所を御承知の方は御示教に預り度い（猶このオランダ西鶴について思ひ合はれるのは、後年江戸で慶紀逸等の俳諧が、當時の芭蕉の聲色をつかつてゐた俳人達から『外道俳諧』と罵られてゐた事であると同じ道にされてゐるもの意で、そこに西鶴と相通するところがあり非常に興味がある。私はいつかこの事についてや、詳しく、一篇の『風流論』でも云ふやうなものを書いて見たく思つてゐる。言葉のついでに一寸記して置く）

思はず語が滯つたが、當時の俳人達、殊に保守派の貞徳門の人々の眼には、俳道に於ける西鶴の歩みぶりは、たしかにオランダに映じたに相違ない。當時の俳壇は、宗因が談林の旗を翻したことは云へ、まだその宗因までが。

いろはにはへの字形の薄哉

なごの句をもつて新しきしてゐたのであるから、他の保守派の人々の句にいつては推して知るべしである。

守武（荒木田）の

落花枝にかへるに見れば胡蝶かな

のやうな句を俳諧の鑑としてこれを我が目標に、あゝでもない斯うでもないを繰返してゐるに過ぎなかつた。即ち俳諧は宗鑑（山崎）の滑稽趣味からやうやく眞面目な俳諧に獨立したけれども、まだその眼は月、花より以外には轉ぜられず、句の表にはかけ言葉や古歌、謡曲なごの踏まへの、智的遊技が相變らず行はれてゐた。この時にあつて西鶴の試みた新俳諧は、それら一切の囚はれを全く一蹴し去つて、眼に觸ふるものこれ悉く俳諧の種ならざるはなしとし、自然界にばかりに向けられてゐたその眼を、人間の生活へ、また徒らに空を見つめてゐたその眼を、ある確かな焦點へ、振り向けて來たのである。今までは頭でばかり句を作つてゐた人々へ、もつと現實を見ろ詩はいくらでもお前の身の廻りに轉がつてゐるぞと呼びかけて、その忘れてゐたものを指示したのである。

西鶴は無學であつた。然し彼は無學であつたが爲め、なまじいの學問ある者よりも、曇らぬ心の鏡を持つてゐた。何ものにもわづらはされぬ純情を持つてゐた。この純情、これが彼にすべてを詩として素直に受け入れさせて呉れたのであつた。

既に一種の概念に身を投げかけて、その小天地に太平の夢を見つめてゐた世の俳人にまつて、これがさうして驚きでゐる

にるやう。忽ち彼には嘲笑、罵倒、邪視等の矢を放つて、四面から敵が押寄せて來た。然し彼はその中に敢然として、談林新俳風の爲めに堂々駒を進めて行つたのである。

西鶴の素行に就いては、その師宗因までが「放埒拔群にすぐれ」をそしつてゐる位であるから、世に批難の多くないのも是非がないが、然し私は今、その事に就いては云ひ度くない。が彼の大矢數興行を以て、彼西鶴の街氣の仕業を見る事はどうか。若し彼が汙らんかなの策としたならば、彼は二度目の大矢數興行を最後として、師宗因の死を待つてその俳諧の筆を決然折り捨て、惜氣も無く浮世草紙へ廻りはしなかつたらう。これらの前後の事情を知る時、私はさう簡單にかたづけして仕舞へないやうな氣がする。それではあまりに彼が心狀に對して察しがないやうな氣がする。私はこの時の西鶴を思ふ度に非常に弱き彼を思ふ。當時彼の心の中の苦しみは、いゝ戯曲の主題だと思つてゐる。これもその中書いてみたいと思つてゐる一つである。

まゝ西鶴は、現實の一角をそのまゝに切りとつて來て、こゝにも詩があるぞと、始めて我々に教へて呉れた人である。試みに彼が『俳諧大矢數』の一篇をひもこいて見。

佛方に猶人相の鐘の音去方の噂にうそをつきまぜて給仕へ寢ましものを大あくび縮緬の裏吹かへす長襦袢二年目に飛驒の内匠がうつ楔町人に生れつゝいたる渡し舟情けも知らぬ響む

しなく五十の秋に襦袢一枚まで坊主は落ぬしんてい末期の水は杓のなりきり夕ぐれは嵐の通ふ張まくらしめ出しに逢ふた所が面白いすき腹に悟の道もなり難し煤はきや終に亭主が見ぬ所

等、今までの俳人のかつてうかつひ知らなかつた境地をザラにしかも何等のたくみもなく詠み出してゐる。實にこの『俳諧大矢數』の一卷では、我國最初の風俗詩集であつた。後世我國に川柳なる一文學の發生すべき運命は、西鶴のこの新しき詩境の開拓によつて、はやくもこの時暗示されてゐたのである。宜なるかな、後に彼の爲めに、一代の俳聖の名をおくるに、各でなかつたものは、實に／＼江戸座の開祖其角その人であつた。西鶴から其角へ、私はこの事の偶然ならざるを思ふものである。世の川柳史家のこころは、宗鑑の『大筑波』をもつて柳風句の濫觴としてゐるが、果して彼にこの暗示があるかどうかが彼が姿に於ける祖である事は云ふ必要はよい、私たちはそこに内から働きかけて來る何ものをも、見る事を得ないではないか。我國最初の風俗詩集『俳諧大矢數』は、また私ども川柳家にまつて、最も古典的な柳樹でなくて何であらう。

私は今、萬歲樂を諺が／＼にくちづきみながら、何故川柳家はこの人を忘れてゐたか、うつら／＼今年の初日に、丹前の脊中をまかせてゐる。

初句會の夜

一月七日夜
於日本橋俱樂部

一月七日午後六時から諒闇第一の句會を例の日本橋俱樂部で開催いたしました。雨に出足をくぢかれ乍らも三々伍々ミ下記の來會者が集まつてまゐりました。作句後、麻生路郎先生は『川柳家の眼』を題して頗る藝術的な講演をなさいました。昨年一月の『商品化時代を経て詩の世界へ』と共に尤も意義ある講演でありました。講演後、各選句の披露があり、それより一同記念撮影をなし靜かに散會いたしました。諒闇中の初句會として申分のない靜肅さで親睦さのうちに幕を閉ぢたことを來會者諸氏に感謝いたして置ります。(二柳子)

路郎、松郎、番外、川洞、十字路、一路、銀燈、三日峯、翠峯、かはる、青影子、久郎、光郎、藤園、のぼる、文錢、龜二郎、ひろし、柳浦、舟々、柳骨、山雨樓、三斗、二柳子、水鏡、助六、醉夢、萬よし、琴香、佳山、祇梵、泗水、三笑、冷笑、飯山、鮎美、秋彩 (名簿より)

人生 路郎 選

人生の閑は女へ戀をする 光郎
子の運を當にしながら生きてゐる 助六
志成らず悻の年をくり 銀燈
華やか過去をばもつてさびしがり 源坊
人生の若さを僧の取上けず 川洞
五人目の子に人生を強く見る 舟々
人生を壁にたさへて見る日あり 十字路
酒飲みの亭主をもつて世を終り 泗水
人生を考へてゐて髭が伸び 飯山
篋竹の今人生を見抜く音 佳山
働け働け親爺のやうに ひろし
人生をかこつに太い棒を振り かばる
人生に坂ありそれを昇りきり のぼる
裏長屋早起きをする家ばかり 山雨樓
人生の裏を人間考へる 祇梵

梅 (兼題) 松郎 選

梅日和終日あるじ 碁を圍み 琴香
梅便り寒さの事は書いてなし 三斗
君が住む宿の梢も梅に見え 泗水
梅咲いて茶店の蔭が動くだけ 二柳子
咲切つた梅の壽命がそこに見え 文錢
梅の實を漬けるに嫁の手を借り 三笑
雪の梅われ蓋がしき炬燵にて 銀燈
引張つて来るは梅のさびしすぎ 川洞
梅匂ふ宿の軸なまほめて 鮎美
こしらへたやうに咲いて 梅の花 佳山

人生の最後は天理教に入り 同
これはまた便所掃除に生じ來し 鮎美
失業の眼におかしさをこらへた 同
(佳)悪名を被し人生の長過ぎる 水鏡
(佳)小學校で泣き奴が知事になり 山雨樓
(佳)悶々として働くが勝さ知り 萬よし
(佳)南湖院暗い心に雲を見る 番外
(佳)二階借りして人生も半ばなり 佳山
(人)哲學で見るは人生味氣なし 彩秋
(地)人生五十結局爛をつけさせ 飯山
(天)いつになれ親孝行が出来るか 松郎
(軸)下積みのまゝで不惑の面白さ 路郎
大臣になれぬことだけわかつた 同

梅白う今宵悩みのある如し 山雨樓
 一本の梅をわざ／＼訪ねに來 彩 秋
 梅林へ元氣な足でやつて來る 同
 よく咲いた梅へ風船引つか／＼ かほる
 かち／＼ようかんを出す梅の茶屋 同
 公園の梅にほへぎも人まばら 飯 山
 梅見人おもはぬ／＼こで三味を聴き 同
 室咲きの梅看護婦の背に擦れ 青影子
 金持てば梅咲く故郷小さ過ぎ 同
 御神籤を結んで梅は未だ蕾 同
 (人)成功の望みも捨て梅を植に 萬よし
 (地)皆咲いた頃にあかれ梅の鉢 助 六
 (天)梅林を距て分家／＼仲がよく 山雨樓
 商 人 互 選

はなやかな顔で喪章を賣つてゐる 藤 園
 駄菓子屋はぶ／＼／＼／＼／＼出し 番 外
 海上風靜に商人買ひまくる 柳 浦
 内容が悪いと聞いても手が退き 三日坊
 買はぬ／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼ 二柳子
 商人の氣安さ／＼／＼／＼／＼／＼ 水 鏡
 改札口又商人／＼／＼／＼／＼／＼ 醉 夢
 バスケット、商人になりに行き 光 郎
 せきたててるやうに商人次を見せ 三 斗

高商を卒へ商人に使はれる 琴 香
 商人に廢兵きつぱり斷られ 青影子
 お悔みについ商談の高笑ひ 銀 燈
 街道を行商らしい早い脚 佳 山
 掛引の中に算盤よく動き 川 洞
 お荷物を預りますで客をつり 翠 峯
 脊廣着一層商人らしくなし のほろ
 あきう／＼の通夜／＼／＼／＼／＼／＼ ひろし
 木綿着て一等バスの大旦那 同
 戸を閉めた後を御破算や／＼ 源 坊
 すつぱり／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼ 同
 丁稚もう商賣人の癖を取り 祇 梵
 ほん／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼ 同
 商賣が女相手で三味も弾け 冷 笑
 商人の子のない事も云ふて去に 同
 あほ口をた／＼／＼／＼／＼／＼／＼ 鮎 美
 算盤へ當座のがれを云ふてゐる 同
 粉煙草をはらひ／＼／＼／＼／＼ 酒 水
 算盤にまからん／＼／＼／＼／＼／＼ 同
 た／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼ 助 六
 商人は前の値段へ恐れ入り 同
 出世して今は船場でくらしてゐる 彩 秋
 損ばかりしても商賣止められず 同

恩給の外に多少の小商ひ 十字路
 凡／＼旅あきう／＼／＼／＼／＼ 同
 商人の羽織が長い京の町 一 路
 商人のまたウキンドへ怒／＼／＼ 同
 商人の云ふまい／＼／＼／＼／＼ 山雨樓
 儲からぬ日の商人は炭をつぎ 同
 商人へ又も女の子が生れ 同
 商人に向かぬ息子の毛をのばし 同
 商人になつてしまつた面白さ 松 郎
 そこは君商賣人のあいだがら 同
 商人に向かず養子に行てしまひ 同
 安本丹忘れた頃にひよつこり來 舟 々
 怒つてる程に商人氣にかけず 同
 つく／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼ 同
 派手過ぎる柄／＼出廻り思へ／＼ 萬よし
 如何に面したか心齋橋へ出し 同
 亞米利加に支店を置く／＼／＼ 同
 商人／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼ 飯 山
 いそがしい中に商人悔みに出 同
 商人の受話器をかけて役所へ出 同
 店を持つて老ひたる母をよろ／＼ 路 郎
 電話一つで親子三人生きてゆき 同
 儲けてるうちは冗談ばかりいひ 同

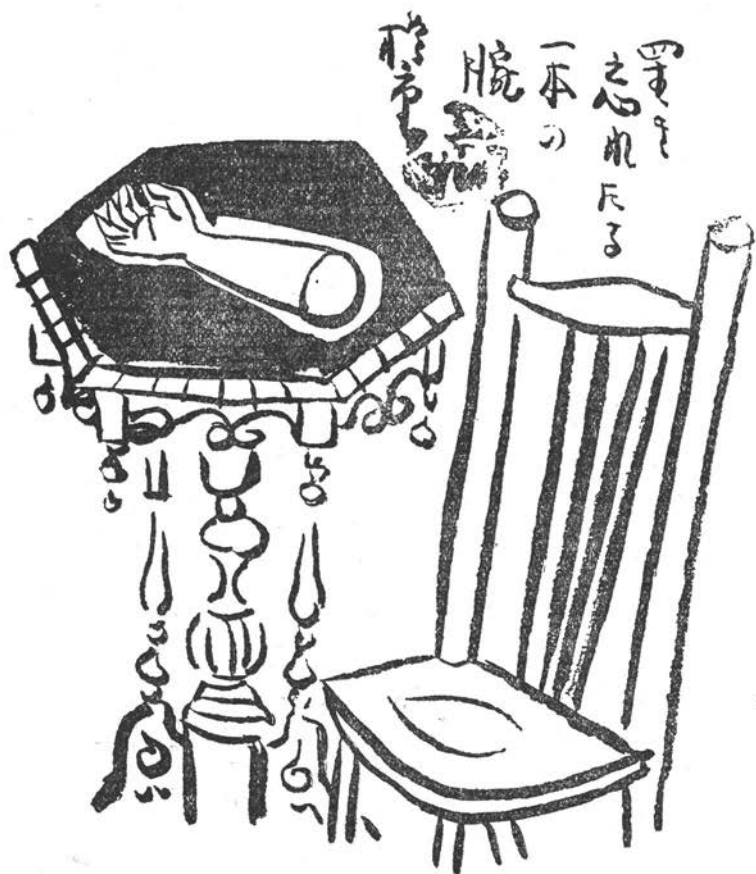
グロテスク

小出 檜 重

一部分ぶぶんと云いふものは妙めづに奇怪きくわいにして氣味きみのよくないものである。人間にんげんの一部分ぶぶんである處ところの指ゆびが一本いっぴん、若道路わくどうろに落おちてゐたごしたら、吾々われわれは青あおくなる。テーブルの上うへに眼玉めだまが一個いっこ置き忘わすれてあつたごしたら、吾々われわれは氣絶きせつするかも知れない。レールの側はたに下駄げたが一足いっさく並ならんでゐてさへ巡查じゆんさの何人なんにんか、走り出だすのである。毛髮もうはつの一本いっぴんがお汁つけの中に浮うかんでゐても食欲じよくに關係くわんけいする。其その不氣味ふきみな人間にんげんの部分品ぶぶんひんが寄より集あつまるご美しい女うつくごなつたり、羽左衛門うさゑもんごなつたり、アドルフマンジウごなつたりする。

私わたしはいつも電車でんしゃやバスに乗り乍たちら怠屈たいくつな時ときこんな莫迦ばか々々くしい事ことを考かんがへ出すのである。電車でんしゃの中なかの人間にんげんの眼玉めだまだけを考かんがへ見る。するご電車でんしゃの中なかは一對いっぴの眼玉めだまばかりご見みてくる。運轉手えんてんしゅが眼玉めだまであり、眼玉めだまばかりの乗客りやくである道行みちゆきく人ひとも眼玉めだまばかりだ。するご世界せかい中眼玉めだまばかりが横行へうこうしてゐる事ことになる幾億萬いくまんの眼玉めだま。考かんがへてもぞつごする。

今度は臍ばかりを考へて見る、電車やバスの中は臍だらけだ。日本中、世界中は臍文化了ふ。怖るべき臍の数だ。
 無数の乳房を考へて見る。そして無数の生殖器を考へて見る。全くやり切ない気がする。矢張り人間は全體として見て置く方が完全であり、美しくもある様だ。それなのに、私は何んだか部分品が氣にかゝる。





唐柳短解

蛭子省 二

は公治長の振り、序に今一つ狂句をお目に掛ける。

縹綫のそばに在るなりやちやう論語に子公治長、可妻也、雖在縹綫之中非其罪也、以其子妻之、から出て縹綫の牢屋の傳馬町三紺屋町が隣であつた事をまごめたのである。

東京の高橋虎雄氏は、犬語を解され街頭にて二言三言いはれるる附近の犬が皆集まつて来る云ふ動物愛護精神の極致である。

(四九)六祖は搗くに大日はさいである

大道へ月を六祖がおきみやけごしくはお竹六祖はへんたらこほんほちの菩薩に六祖骨ををり

第二句の月さはウスの痕、六祖さは曹溪大師の事で六祖大師緣起外紀に、大師名惠能、父盧氏諱行瑫、唐武德三年九月、左官新州、母李氏先夢庭前白華競發白鶴

雙飛、異香滿室、覺而有娠、遂潔誠齋戒懷妊六年師乃生焉、唐貞觀十二年戊戌歲二月八日日時也こある、薄幸な人で父に死別し柴を賣つて母を養ふた、五祖弘忍

禪師に仕へ碓房の勢に服し米をつく事八

(四八)其名まで鳥のやうなり公治長

公治 長芝 居の鳥は解りかね
公治長の事は論語に度々出てゐます、金言類聚抄なる零本に人解鳥語三事として三語が載せられて居る中の一つに。

論語疏云、公治名は長、孔子の弟子也、姓は公治、名は長、范甯云く名は芝、字は子長、子長衛に從て魯に還り、行て界の上りに至るに、鳥相呼を聞て青溪に往けば、死人の穴を食ふ、須臾に一人の老嫗を見る、道に當て哭す、治長之を問ふ、嫗兒也、往てみれば即ち其兒也、已に死せり、村司に告ぐ、司嫗に問、何れよりか之を知を得たる、嫗曰、治長道ふこと如此をみる、村司當て云く、治長

何を以てか人を殺す、長云鳥語を解て殺さず、王云當に之を試むべし、若必ず鳥の語を解せば便ち相放たん、若し解さずば當に償死せしむべし、治長を駭む、獄に在るこ六十日雀子あら獄の柵上によつて相呼んで嘖々たり、長笑を告む、吏王に啓、治長雀を啖ふ、何の道ふ所にして之を啖ふ、治長曰く雀鳴いて嘖々たり雀曰く連水のほりに車の轆て黎粟を覆せり、牛角を折り收捉て盡さず相呼んで往啄む、大王未だ信ぜず人を遣はして往てみるに、果して其言の如し、後又猪及び蠶の語を解いて屢驗あり

孔子より五丁も行けば紺屋町(狂)

『孔子』は聖堂をさしたものの『紺屋町』

ヶ月、禪心に透斷した、神秀の偶、
身是菩提樹 心如明鏡臺 時時勤拂拭
勿使惹塵埃
に對し曹溪の呈偈は、

菩提本無樹 明鏡亦非臺 本來無一物
何處惹塵埃

爰に於て米搗の曹溪が衣鉢を繼いで六祖となり南方に宗風を舉揚し、神秀は北方に進む、南頓北漸と稱す、六祖大師法寶壇經に龍記惠能の偈のあつた「次日祖禪至碓坊、見能署石舂米語曰、求道之人爲法忘軀當如是乎、乃問曰米熟也、未惠能曰米熟久矣、猶欠篩左祖以杖擊碓、三下而去、惠能即會祖意、三鼓入室、祖以袈裟遮圍不令人見、爲說金剛經」云々即ち大悟して祖道を提擲宣傳してゐる。

(五〇) 棺あつて角一つなし貧學者

此句何篇にあるか知らぬ誤字はなからうと思ふ。自分には數ヶ月來の難句の一つで駄勞解をつけてみる。角は錢の事として擲の振りでらう。論語「顏淵死、顏路請子之車以爲之槨、子曰、才不才亦各言其子也、鯉也死。有棺而無槨吾不徒行以爲之槨、以吾從大夫之後、不可徒行也」角で世間がわたられる一朱判(文政)

「角ぢや世間が渡られぬ」云ふ諺がある、處世は圓くゆゆかねばならぬの謂である、又「角錢に社軒著せたやう」は堅苦しい人をつたので仙臺通寶は方形であつた。

鳥の目も陸奥出生は角があり(文化)傾城の誠 四角な釜をふり(天保)少し角だつて一文はぶかれる(文化)四角に包む仙臺の百旦 那(天保)四角なは錢仲間、野暮のやう(天保)(五二)此ひしほ捨てしまふ曰く(天明)十八史略「立嗣續之子、輒嗣續入、輒拒之、子路與其難、太子之臣以才擊子路、斷纓、子路曰、君子死冠不免、結纓而死衛人醢子路、孔子聞之命覆簞」

(五二) 樊於期が首をたいなし棒にふりはんゑきが首はお先に使はれる

史記荊軻傳「燕の太子丹、秦に質したり秦王政禮せず怒りて亡歸す、秦王を怨んで之れを報せん」欲す、秦の將軍樊於期罪を得て亡けて燕に之く、丹受けて之を會す、丹衛人荆軻の賢を聞いて軻を遣らんと欲す、軻樊將軍の首及び督亢の地圖を得て以て秦に獻げんと請ふ、丹於期を殺すに忍びず、軻自ら意を以て之に諷し

て曰く、願はくば將軍の首を得て以て秦王に獻せば必ず喜びて臣を見ん、臣左手に其袖をとり右手に其胸を搥さは則ち將軍の仇報じて燕の恥雪がれん、於期慨然して遂に自ら刎す」

(五三) 怪力亂心で座中を左慈化かし

此は鳩でござい左慈はいひ三國志の魏王宮左慈譚に詳なり、左慈字は元放道號烏角先生云ふ、曹操左慈を叱つて汝怪しき妖術をなし我愛する柑子の實を取たる、左慈つて試みに剖つて見むとて、柑子を自ら剖けば實ありて味よし、或は酒五斗を呑むて醉はず或は義眉山に遁甲天書を有すとか、鐵の枷を首にして投獄すれば枷も鎖も紛々として落つとか、數十年物を食すとも餓ゐる事なく一日に千疋の羊を食ふも飽かずとか望みよあらば四方の珍味を盡さじ龍の肝、牡丹花、松江の鱸及曹操を出す、曹操捕めて殺さむとすれば羊さ化する或は白鶴に打乗り雲上に飛揚す、玉鼠隨金虎奸雄一旦休さ呼ばりければ曹操諸將に下知して鐵砲をうちかけしに忽ち狂

風起る、曹病を受けて如何に治すれ共驗なし。

初句の「怪力亂心」は、「怪力亂神をきたるたいこ持」の句もあり

論語述而篇「子不語怪力亂神」より出づ

唐に左慈さて日本に芥子の助

芥子の助の事は近く中央公論に朝倉無聲氏が見世物研究を御執筆になつたから参考せられ度い。黄表紙「京傳愛世之醒」に

錢さいく我はこれ四文錢一本や南錠一片云下卑な所ではなくぶつつけの一角仙人は我事なり汝仙人じみた所

あるにより今仙通を授くるなり此丸藥は仙通丸云藥なり是をのめば忽仙道を得る事神の如し其上は何事も自由自在にて是をかうして見たいと思ふ時

なつたり／＼手を三ツ打さん願にてもかなふなり中々芥子の助ぐらゐの及ぶ所にあらず

源水は齒抜き目抜きは芥子の助芥子の助雉子の隠れる姿あり

芥子の助は豆と徳利の使ひ手である。

餘事ながら黄表紙の一節に關係ある句を掲ぐれば、

南錠も子供が出来て手たすかり南錠は生薑一片ほごな禮一角は出来ず南錠さいがくし

(五四)木枕もなくて顔淵だを言ひ同じ黄表紙に「顔回はひじを曲て枕さず

樂しむ其内にあり云つたがこれでも足る事をしらば蒲團をひこり柏木のきにもおこしらぬ負おしんだが」さある。

樂み其外にあり女房やき(松四十一篇)歌)そしい綾水を呑み二日(三十六篇)鳥)

俱に論語述而「子曰飯蔬食飲水、曲肱而枕之樂亦在其中矣、不義而富且貴、於我如浮雲」

(五五)雁にふみ附けて末世に名を残し蘇武傳に、蘇武字子卿、武帝の時中郎將を以て節を持し匈奴に使す、單于之を降らしめんさ欲す、酒ち武を幽し大窖の中に置き、絶て飲食せしめず、天雪を降す武臥ながら雪を旆毛を齧み并せて之を咽む、數日死せず、匈奴以て神と爲し……

匈奴詭り言ふ、武死す常惠漢の使者に教へて言はしむ、天子上林苑の中に射て鷹を得たり、足に帛書を係くるあり、言ふ某の澤中に在りて乃ちその言の如くせしかば、單于隠すこ能はず是に由つ還るを得たりと。宣帝諸功臣共に麒麟閣に其像を畫かしめた。(今昔物語、源平盛衰記俊賴無名抄等にも載る)

(附記)(五三)に源水の句を一つ載せたから序に記す。九月號拙稿「古句雜考」に就て卯木氏からの來書に「古句雜考」拜讀去月「田原町」の條を書き候節

松井屋は奴一人をなぶり切り

の句を忘れ卯木句抄中の「松井屋は抜きさうにして賣付ける」をかき後になつて氣付き中略長井兵助より松井屋の方が有名とあれど如何のものにや、兵助は田舎の子供でも知り居候へ共松井屋は一時有名なりしだけ存じ候、寧ろ有名なのは松井源水にて田原町には源水横丁といふのが有之候、現代の源水は震災前までは十二階の附近に住居したやうに覺候、

何奴詭り言ふ、武死す常惠漢の使者に教へて言はしむ、天子上林苑の中に射て鷹を得たり、足に帛書を係くるあり、言ふ某の澤中に在りて乃ちその言の如くせしかば、單于隠すこ能はず是に由つ還るを得たりと。宣帝諸功臣共に麒麟閣に其像を畫かしめた。(今昔物語、源平盛衰記俊賴無名抄等にも載る)

(附記)(五三)に源水の句を一つ載せたから序に記す。九月號拙稿「古句雜考」に就て卯木氏からの來書に「古句雜考」拜讀去月「田原町」の條を書き候節

松井屋は奴一人をなぶり切り

の句を忘れ卯木句抄中の「松井屋は抜きさうにして賣付ける」をかき後になつて氣付き中略長井兵助より松井屋の方が有名とあれど如何のものにや、兵助は田舎の子供でも知り居候へ共松井屋は一時有名なりしだけ存じ候、寧ろ有名なのは松井源水にて田原町には源水横丁といふのが有之候、現代の源水は震災前までは十二階の附近に住居したやうに覺候、

何奴詭り言ふ、武死す常惠漢の使者に教へて言はしむ、天子上林苑の中に射て鷹を得たり、足に帛書を係くるあり、言ふ某の澤中に在りて乃ちその言の如くせしかば、單于隠すこ能はず是に由つ還るを得たりと。宣帝諸功臣共に麒麟閣に其像を畫かしめた。(今昔物語、源平盛衰記俊賴無名抄等にも載る)

(附記)(五三)に源水の句を一つ載せたから序に記す。九月號拙稿「古句雜考」に就て卯木氏からの來書に「古句雜考」拜讀去月「田原町」の條を書き候節

松井屋は奴一人をなぶり切り

の句を忘れ卯木句抄中の「松井屋は抜きさうにして賣付ける」をかき後になつて氣付き中略長井兵助より松井屋の方が有名とあれど如何のものにや、兵助は田舎の子供でも知り居候へ共松井屋は一時有名なりしだけ存じ候、寧ろ有名なのは松井源水にて田原町には源水横丁といふのが有之候、現代の源水は震災前までは十二階の附近に住居したやうに覺候、

御承知は存候へ共女のやうな口をきく
何時もニコくした男に候」さあつた。
全く此の通りで拙稿から『寧ろ』の字を
抜いて頂き度い。源水横丁は田原町三丁
目中横丁の事で今は無い、挿雲氏の『江戸
から東京へ』にも『享保十一年以後數回
大奥に招かれ獨樂廻しの曲藝を臺覺に供し、
齒磨粉は貰はれなかつた。傾がある
にもせよ、其都度銀一枚若くは二枚は確
かに賜はり、多大の面目を施して退出し
堅くその事を封じられたに拘はらず、觀
音境内の人寄せ口上で自家吹聴をやつた
から、掏摸の親分だらうなご、疑ふ者は
一人も無かつた、謹嚴な八代將軍吉宗公
が口を開けて、松井源水の獨樂廻しに隨
喜したさあるから人間は本當にわからな
いものだ』と。神田大祭禮番附をみても
十六番狸々十七番花籠に牡丹の間へ、
源水獨樂曲がはさまつて居る『近世珍聞
集』寛政三年の條に『九月十五日神田大
明神御祭禮、出しばかりにて、太神樂並
にこま廻し松井源水、子供角力、これば
かりにて御座候よし承り候』とある、

初柳談會

こんな事で一層廣告は行届いたわけ、源
水に就ては後日詳しくかく機會があらう
二月の十二日の夜に初柳談會を鳴尾の遅
日莊で開くことになりました。從來は第
二の日曜の午後一時から十時十二時まで
も開いてゐたのですが、本年からは第二
士曜の夜に開くことに改めました。地方
の方で京阪神方面へ來れるやうな機會
がありました場合には萬障を繰合はして

埋め字の募る

◇いさ下てし募應にん盛◇

作句練習のために埋め字を募集することをいたしました
右の句は古句です。○○○○○○○○のころへ七音の文字を挿入し
て出来るだけ佳句にしてください。古句と全く同じになつたからミ
て必ずしも嬉しうござんではありませんが、古句と分たはぬ句ミ
なることあるだらうと思ひます。多少違つた文字が這入つても句
意に於ては殆ど違はぬやうになることあるでせう。かと思ふに一
字や二字の相違から句意が全然違つてしまふ場合もあるでせう鬼に
角上七音の變化がされはさ違つたものさなるか興味の深いころ
だと思ひます。これは出来るだけ澤山な人に應募して頂きたいと思
ひます。幾分作句上の參考にもならうと思ひます。締切は二月十日です。締
切日は嚴重に守つて下さい。

御出席願ひます。夜間だけの會ですから
先づ時間としては四五時間しかありません
から勤めて早く出席されるやうおすめ
めいたします。何か話題をひつさけて來
て呉れる方があれば大變ありがたい譯で
す。例の川柳外の社會漫談なども、ます
／＼奮ふことと思ひます。本年は川柳の
輪講などもやつて見たらさうかと思つて
ゐます。こん度の柳談會記は熱血兒井比
刀三君が書くことになつてゐますから出
來るだけ好話題を作つて同君をよろこば
せて下さい。(遅日莊主人)



川柳塔

○

塚崎 松郎

見るものみな影あり夜をほつねん
玩具一つに子供の眉毛吊り上り
灯がつけば鯨のいろもなつかし
長柄葬儀所勤務を命ぜられてる
彼の昔を思へばこそ五圓貸し
嫁の齒に切れられし糸の行末や
議會ではやれ國民の人民の
別れたのか友達さびしさうにき
さびしさに林檎をむけばまたさびし
夜にかけて母の情は綿を入れて
春なれや女の息のまるうして

○

黒木 莢豆

養育費ざつみにしてもひき身上
相談に行けば親類を困み
子煩悩同志足並揃へたり
さりながら陽は東から西へ落ち
萬象のみなはつきりみて陽の寂し
貯金々々胎教さいふこごがあり
不自由もなく光明をもてあそび
春くればものみな丸く光るなり
我母の一生を風の音がする
孤兒のこゝろはかぜの吹く姿
國へかへりて

妹の一人足らない國へつき

○ 檜山千代二

いくぢなさをあきれるうちは人間よ
目出度さを裏切つて行く新佛
それは只擬勢にすぎぬ男だよ
寒かつたであらうの親がなつかしく

柳路居にて

三人の親でぎの子も男の子

○ 松本助六

御近所の起きて居るのを寢間で知り
十年の前の後姿を見競べる
旦那は旦那はんぞ甘く丸めて見
松に吹く風は細かい風のやう
海岸へ立つて歐洲の事思ひ

○ 井上刀三

寒いので女房も何か云ひに来る
帽子から惚れる心を笑はれて
辭める氣も乗らねばならぬ終電車
雨戸一枚操れば定めなき雲
縋帶をしてゐれば女にいたわれ

女一人居て世の中を知る

○ 岩崎柳路

別荘のポンプに油切れた音
乗合の車掌の聲もゆれて居り
頭痛から丸刈りにしたと見せに来る
ゴム靴で踏む初雪のやはらかさ
ニツケルの匙ほろ酔のじつと見る
代表が葉山へ着く雪であり

○ 徳田双柳

獵銃が其の本能を募らせる
君が代さ太平洋は一文子
また俺が俺がで俺がおさまらず
又元の聲で母親泣き出させ
學生のサロンに見惚れてゐるばかり

○ 麻生茂乃

時雨れけり雀の宿へあられ落ち
考へてはたく財布にもなれて
子澤山灯さもし頃を湯から出る
賽銭もあなざりがたき世はなり

○ 酒井駒人

出迎はただがや／＼煙草なり
公用で來たのが時計ばかり見る
高座からしんみりされて涙ぐみ
兎飼ふ家の近くに小さな驛
義理の二字明日は見合の日となりぬ
豆腐屋を眞似れば豆腐屋ふり返り

○ 庄 萬よし

初詣で皆息災な歩調なり
天氣だけほめて昭和の三ヶ日
御諒闇火事絆纏に用もなく
借つてゐる人に縁談頼れる
恐れ多い紙面の裏は風藥
一人兒の涙もろさを見るばかり
コッボリを膠いて操を賣り歩き

○ 西 本 三 笑

頼りないわ／＼惚れてゐる
ふたり目の婚を二タ親急いでる
まける氣になつて算盤おいて見せ
晩酌に女房の爪の黒い事
色町もこの柄ですさすゝめられ

○ 橋 本 二 柳 子
あさめしがすむごの子も膝へ來る
古本屋讀みあいたのか手をつくね
大根の白ささ牛のいきが見え
元日を婚養子神参りご定め
新調の服が嬉しい婚養子

◇粒々集

蛭 子 省 二

峠茶屋古草鞋を賭けて別れる
迷ひ兒が雀の卵みせてくれ
ほめられる婚五分刈に胸毛ある
柿の木に一つ残して咄し合ひ
手袋を忘れ自働電話に男居る
電柱さならむで子を探す夕焼け
仔猫あづけられ日毎に君を抱く
靴下の穴を一燈園に愛で
子福者へ野良犬の子を撰ませる
口吸はすべき小障子に蝸牛
伯母の家をのがれ足袋つづる命
月給日さんほの親子飛むでる

贅筆追加

蛭子省二

▲モ一度「川柳参尾志」を主として雑記

したい。蘭丸が千段巻を数へてゐるを信
長は則より見てゐた。後日衆が集まつた
時、信長が皆に千段巻の数を尋ねたが何
人も答へ得ない。蘭丸は只黙然として居
るのみである。ナゼ答へぬかこの仰せに
會て私は数へてよく承知致し居りますと
言つたので、其正直を非常に賞せられた
とある。著書は聊か趣きを異にしてゐ
るが

雪隠で小姓の智恵を刻み鞘

の参考になる。——某日信長庭園を散策
して居る内に渴を覺へたので、木上に腰
をおろし、草履を頭に載せ、之れを持て
來よ蘭丸に申つけられた。直に一碗の
茶を持參して献じたので其の機智を愛せ
られたとある。木の上に人ありて草を戴
くは「茶」の字である。この事を詠むだ
句が一つあつた。今見出さぬは残念。

▲私の祖母は中村稻葉地出身、今の中村
公園のすぐ隣、幼少の折りは秀吉誕生の
跡から寺内産湯の井へ遊びに出掛けたま
のだ。平民宰相の歓迎せられる現代だか
ら、織田信秀の足輕木下彌右衛門の子で
結構である。川柳は専ら彌助説。

若水を初湯に彌助焚きつける

元旦に生れたも、うまく仕組だ丙申だか
ら猿に似てゐる（一説には日技神社に祈
つたから猿が乗りうつたのである）朝
鮮では犬に酷似す云ふ。大塚丸で六本
指、黒子があつて瞳が二つある。唐大和
の英雄の相を一身に具備して居るのだか
らタゞの猿ではあんめエ。其上へ

手の筋で雲井まです奴唄

▲小田原攻の句にこんなものがある。

豪氣に仕出した伊勢屋は新九郎

氏直が高野山で味噌摺坊主になつたのも
高野山は秀吉の信仰厚く、彼の木食上人
應其の如きは秀吉の葬儀を扱つてゐる。
▲唐はカラミよび、迦羅の事で朝鮮であ
る。

日本の蛇の目唐までにらめつけ
秀吉の手紙の中「唐入り」さあるは、征
明の意味であつたから、唐は支那を指す
唐人はみんな嫌ひな蛇の目鮮

唐人は朝鮮人のことであるが、明治に
及んでからの唐人はウント廣義になつて
西洋人を指す。今では唐及唐人を合併し
て日鮮融和の眞際中だから面白い。

▲和漢三才圖會、三河國土産には砥（名
倉）碁石伊良岐（崎）なごあるけれど、岡
崎儀はない。尙ほ未調である、三河酒鬼
殺し拙稿くだ参照）に就ては

鬼殺しので休ふ田村堂

鈴鹿越立場できめる鬼殺し

なご謳はれ、味辛く惡酒である。下野で
は鬼好み、美作ではやれいた酒、駿河で
はてつべんなご云つた。江戸職人歌合に
酒屋 戀ふるこも今はたあはんみかは
酒胸いたきまで何思ふらん

▲三賊敗戦

大がきが落ちたで石田遊いつら
醒睡笑巻の一に、雄長老作

大かきの陣のはりやうへたけにてはや

まくれたるしふのせうかな
三成の生國では實際ヘラを用ひたものなりや。

へらがあるのにのべ紙で石田拭きのべ紙は右ヘラに對して都人の意か（色）三味線——懷紙も延べは女めくみて小菊五つ折り）それとも侍の意あるか（續）百一錄——延紙三束づつ侍（中八人）のべ紙は堅七寸横九寸位なる杉厚紙、鼻紙なごに用ふるもの。

▲前句は拾遺、後句は五編
名物のうちだご御油ですすめてる
名物のうちだご御油ですすめこみ

兩著にはコンナ僅かの相異が澤山ある。
そして拾遺の方が悉く難解になつてゐる。

▲景清の句に

惡き名はつけき二君に仕へぬ目

惡の意味は（一）善人惡人の惡（二）強剛の事の二説がある。これは前者が本來のもので後に後者に轉用されたもの。景清の場合には學者の説もまちまち、最屢次第で

あるが、貞丈雜記「惡源太惡七兵衛惡四郎」なごの惡の字は、自分につけたるにはあらず、惡事ある人を他人より呼びならはしたるなり、古き書に惡の字を添へて惡何がしあるは皆其人の惡事ありし故に知るべし」にある。然し之れ丈では満足は出来ないの自時代相の觀察がある。惡禪師は公曉の事、惡右衛門督は藤原信賴の事、惡靈左府は藤原顯光の事、赤井惡兵衛の如きは後者に屬すものであらう。（十二月三十一日）

川柳家にもつこ

苦まればならぬ

安井ひろし

余の知友横川毅一郎氏が編して、最近中央美術社から發行した大觀自叙傳を讀んでみるに、今日日本美術院の巨匠として日本の美術界に重きをなす横山大觀氏も非常な浮世の辛苦をなめて來た事がわかる大觀氏生涯の一轉化は所謂美術學校紛

擾事件である。その結果岡倉、橋本二先生等日本美術院を創立されてからの事である。

其後印度に行き、歸國後明治廿七年二月十一日露國交斷絶の日に横濱を解纜米國に渡り、紐育の展覽會で二千五百弗廉いので三百弗さういふ繪が高いのから盛んに賣れた頃は恐らく愉快だつたらうに察せらる。それから英國に廻つて歸朝、明治廿九年十月悲運の日本美術院が背水の陣を布いて常陸の五浦に引き移つた頃には實に眼もあてられぬ苦境だつたらしい。白叙傳に曰く

日本美術院が、常陸の五浦に移つたのを聞いた都下の新聞紙は「日本美術院の都落ち」「と報じ「朦朧派の没落」と嘲笑した。朦朧派の攻撃は創立以來私と菱田君の上に絶えず加へられてゐたのである。私と菱田君が岡倉先生の考へに従つて、繪畫創作の手法上につつの新しい變化を求め、空刷毛を使用して空氣、光線などの表現につつの新しい試みを敢てした事が、當時の鑑賞界に容れられず、所謂朦朧派の罵倒を受けるに到つたので（此特殊な形容詞は當時の新聞記者諸君の命名したものであつた。一般

に穩健な畫風が尊ばれてゐた當時の鑑賞界にあつては、吾々二人の一種の「新奇」は此頃の上流社會からは殆んど惡覺の如く看做され、従つて二人の繪の需要が全くなかつたこと云つてよい。下村、木村の兩君などは當時と餘程土佐の風を含んで、吾々程急進主義でなかつたから相當に需要もあり、豊かな生活も出来たやうであつたが吾々の上には、只享くるものは罵倒以外には何物もなかつたのである。

所謂朦朧派がいゝと考へたのではない、只だ畫の研究から一種の自覺を促され、今まで試られなかつたものを表現しようと思つた。過ぎない。この眞面目な研究の過程として、如何なる罵倒も我慢しようと思つた。毀譽褒貶は斷じて眼中に置いてならんと思つて、一途に自己の信する道に邁進したまでである。

さ、如何に大觀氏が自己の藝術に精進し勇敢であつたか、窺はれる。

そして大觀氏は其日々の生活に自ら身を切らるゝような苦しみをなめたのである。また曰く

當時日本美術院を預かつて居た長澤延次郎氏が下谷の田所病院に入院して居た。病中の岡倉先生を訪問して大觀、春草(菱田)の身の上を心配して「あの儘であつては二

人共乞食になつて終ひますが、どうするおつもりです」と云つた時、岡倉先生は「乞食になつてもいゝではないか、本人が自己の主張する藝術に忠實なのだから、乞食になるまで見てゐよう、然し若し二人が乞食の境遇まで行つたときには、あなたは一つ着物を送つて遣つて下さい。私は米や味噌でも送ります」と約束されたといふ事であるが、この事を後で聞いた時私は先生の眞の愛情の發露に、此時の情景を涙なしに考へられなかつた。

實際私と菱田君の生活は、乞食にも近かつたであらう。あの魚の廉い五浦に居て魚を買ふことが出来なかつた。二人は互に海へ出て魚を釣ては飯の菜をあさつたものである。どうして居てはいくら待つても繪を描いてくれと望んで来る者は絶へてなかつた。仕方がないので水街道や前橋邊へ遊歴に出かけても見たが、尺八が廿圓か廿五圓で精々二三枚しか賣る事が出来ず、相變らずの極貧の中に五箇年を堪へ忍んだ。此五浦の生活は、私の生涯を通じての苦闘時代であつた。

さ云はれて居る。如何に藝術にたづさはる者に苦難が多いかわかるのである。新潮の中村武雄(夫)も

よき藝術は苦闘のうちのみに生れるといふて居るが、如何に新しいもの、異

端なもの、歩む道の苦しいかわかる川柳にして所謂何々調に追従して居れば無事平穩である。然し一歩出て炭づいでく女をうらむ

路郎

同

同

同

なごの獨自の境地にいろゝ中々論難されるのである。然し各自のもつ獨異の素質をよりよく成長させるころに藝術の尊さがあるのだ。

それはさうしても大觀氏にをける岡倉先生のように眞の愛情ある先覺者がなければならぬ。幸ひ川柳雜誌主幹路郎先生の如きは其點について實に理想的の適任教導者であつた。

川柳は遊びであると思へて居る人達には眞の遊びはわかつて居ないのだ。眞の遊びとは洗練された遊びとは結局苦闘の中からでなければ生れないのである。川柳が創作である以上、母が兒を生む悩みのやうに、生みのなやみなくして眞の川

これも人の親

— 師走の日記から —

安川久流美

柳、生きた川柳は生れださないのである
われ／＼は眞に生れ出る川柳を作るべく
苦しまねばならない。川柳が昨春路郎先
生の説かれた如く、一句いくらに賣れる
時代が来るなら、恐らく大觀氏の如く乞
食の生活に至るまで精進する人も出来よ
う。斯くしてはじめて川柳の光を放す時
代が出現するのである。

俳句界にみても、大阪の來布、素石、
月斗みな自分の財産をなくし、一生をな
けうつて句界に盡くし、ようやく今日一
家をなして居る。實に川柳の黄金時代を
つくる前にはまだ第二第三第四とつ

ゝく路郎先生がなければならぬ。先生
の程度にまで川柳を愛し川柳のために一
身を捧げるの徒が隨所に生じなくては川
柳が社會的に確乎たる地位をきづく事は
出来ない。

川柳家はもつと自覺し、奮勵し苦るし
み、川柳に精進する事が切に必要である

(二七、一、七……)

病む妻をみさりつゝ認む)

十二月廿六日——けふは私の誕生日で
ある。毎年この日には小豆の交つた御飯
を焚いて、心ばかり自分の壯健なからだ
を祝ふことになつてゐるが、今年のそれ
は廢めました。言はずもがな、神去りま
して年號昭和に改元されたるあくる日さ
なつたからである。

この後、私の誕生日の前日に永く久し
く『大正天皇祭』の旗日になるので、
記憶も新になつたやうである。

……
今月は偶然にも、劍花坊夫人からミ、
路郎夫人からミ御親切な書簡を頂いた。
「共に夫君を補佐して川柳三昧に入つた
東西の才媛好一對である」ミ同人の眼隠
子君がこの間の例會に喋つてゐたことを
思ひ出した。私はその兩女史共に二三回
聲咳に接してゐるから、作句ミ人品を合

し見て女史等の柳眼を見つめてゐる。最
近の句として

穩かな浪に一びき跳ねる魚 信子
物足りぬばかりで心滿される魚 同
双六にまけてやるのも母の慈悲 同
つや／＼けき碗に春立つばかりなり 同
等私の好きな句である。信子女の男性的
力の籠つた句想、蔑乃女の女性的愛情の
句想、共に女流作家として全く東西の白
眉といつてよい。

……
禁酒して百ヶ日目になる。別に苦しい
と思ふぬが、時折さびしいと思ふ。この
頃の美しい雪景色を見ては、芳醇の香、
頭腦をかすめてありし日を思ふ。

勤め先でぜんざいを食べた隣りの菓子
屋に借金が出来たのも、あへて不思議で
ない下戸になつた。斯くして諒闇の春を
迎へるのは意義ある年になつた。

……
路郎さんばかりでなく私も可なりの子
煩悩で、子の句を吐くから時折一部川柳
家の愚痴ッほさを笑はれてゐる。紋太氏

の近作
生差湯を呑んで寝なさい一人ツ子
路郎氏の
箸紙を父おちついて書いてやる
私の

ひもじさを堪へ我子を見つめたり
等々、子をもつた個性ならでは味はれな
い點が多々ある（紋太氏も子供があるこ
思ふてゐる）子供をもつていさしい子供
の句を作るのが眞實を吐くのである。

雪國に三十五回目の誕生の日を迎へた
私は、明けて七つになる女の子にゴム長
靴を一足買つてやつた。彼は喜んで雪に
遊んでゐる『雪』の題が出れば
引越せば小摺板を忘れし子
さいふ句を吐く、この頃の私は子供の爲
めに句想も老ひて行くやうである。

新年の懸賞新聞川柳の句に
犠牲者を忘れ祝盃舉げてゐる 紅の花
さいふ句を天に抜いた。作者は決して賞
に眼をくれる人でない。金澤で今最も川
柳に忠實でそして熱心な男である。この

句を詠んで何ものかを考へさせる社會制
度である。（十二月二十六日）

陶然の種々相

萬 よ し

○酒の禮讃は竹馬老に李伯に譲る。こゝ
には如實の陶然の諸相を述ぶるのみ。
○五合量の酒は二合の半ばを甘露の味さ
し、一合量は小杯三杯を然りす。こ
の程度に節酒せば、百藥の長さして長壽
疑なれども、常識の呑み手にして酒
の妙味に至るこゝ達し。
○呑んでる間は相手かまはず話しかけ、
洒落を言ひ、氣焰を吐き、身の上を語り
議論をなすべし。惡酔を防ぐに尤も妙な
り。相手に迷惑がられるこゝあれども、
牛は牛づれ、狸々狸々を知る場合多く、
一夜にして十年の知己を得る事少からず
○よく食ひよく呑むは胃腸健全なる豪傑
肌にして、一皿のコハワタで五合でも一
升でも平けらるゝのは本來酒の禮讀者なり。
前者に二日酔なれども後者には往々在突
○酒に煙草と共に用ゆるは惡し、惡酔の

基となるこゝ多し。
○酒の量を語るこゝ勿れ、酒に量なし、
醉を眞ぶ。
○陶然として獨り堂を取つて喋り續ける
人はお人善しの標本にして、管を巻く人
に惡人があつた例しなし。
○飲酒短命説は可なり古く行はるれど、
長命を調ふれば案外に酒黨多し。新町九
軒の西川さいふ九十二の壽で一昨年物故
したには往生半ヶ月前まで一合の酒を缺
かさざりき。道修町の三枝さいふ骨董屋
七十三歳、萬よし店頭に三合を傾けて維
新を物語るには壯者を凌ぐ意氣あり。わ
が中學のクラスでもうになつた連中が三
分の一、人生五十を如實に痛感するが、
故人に左利きが少くしてクラス會で相愛
らず氣焰を上げる手合は可なりの酒量の
持主ばかりなり。
○四間道路を斜より斜に千鳥足、タクシ
ー、電車にも觸れずしてチャンゴ吾が家
へ歸るも酒の妙味の一つなり。
○酒呑み本性たがへずさいふ眞理あれど
も陶然一睡すれば前夜の事は忘れ勝ちな
り心すべし。

柳書の刊行に就て

遲日莊主人

募

集

句

産後

森東魚

産褥をあけて明るい妻となり
 梳き櫛に見へる産後の弱りやう
 産後から子供の寝間がちこ變り
 産後からスター焦慮の日が續き
 二タ言目には産後だこ女房云ひ
 産後にはもう兒はいらぬ様云ひ
 産後さば云へあんまりこ姑言ひ
 産後ふこ母になりし日淋しまれ
 母こいふ其うれしさの産後なり
 お産からするく居る里の母
 乳を捨てる程に産後健かさ
 責任がはつきり産後身にこたへ
 産見舞靜に受けてにつこりし
 女には女こ産後見舞が來
 産後だこ見て亭主が干場へ來
 伊達巻は産後の妻をくびる様
 産後からぐちも無く來る里の母
 産後もう白粉を塗る宵となり

源坊 醉郎 志郎 銀燈 鎌月 芳雪 一葉 千鳥 大夢子 柳秀 天花 拔天 利劍坊 夢人 翠峰 閑路 正次 山雨樓

産後からけつそり肩が寒いやう
 子を抱いて來たへ番臺目出度
 身二ツの堀江で今度出る氣なり
 まだ視へぬ子へ母らしい口を利
 小兒科で産後さ産後馬が合ひ
 産後から亭主も一人抱いて寝る
 姑の給仕に産後少ししてれ
 平常着のまんまの母が産後來る
 喜びに浸つて産後寝てるだけ
 産後さば見へぬ妾の美しさ
 産褥に子守唄等作つて見
 幼稚園産後の母へたゞをこね
 産後ふこ亭主にすまぬ思ひをし
 産後からばつたり來な呑み仲間
 産後から氣安くお父さんこ呼び
 面やつれした眼に母さこいふ自覺
 宮詣りすつかり母になり切つて

同 美の作 同 光路 同 村句茂 同 のほろ 同 白郎 同 耕水 同 山月 同 萬よし 同

秀逸

近來川柳が旺んになったので柳書の價額が甚だしく暴騰した。それが爲に無暗に柳書の刊行が企てられるやうになった。一面喜ぶべき現象のやうではあるが猶も杓子も出鱈目な本を出版するこいふことは餘程考ふべき事ではなからうか。本屋は川柳のこに就ては全くお先眞ッ暗であるから何でも宜しい賣さへすれば結構だこいふ方すでも奴からうが、一面讀まされる方の側にもなつて見なければ駄目である。買はされる身にもなつて見なければ駄目である。文字さへ埋つてゐれば宜しいなこいふ不心ばな、何等の研究なきデモ編纂者やデモ著述家の筆になるものがあこからく出版された日にはいくら柳書好きでも食滞してしまふ。やがて賣れぬ時代が來やう。いゝ本でさへ見接ひなく賣れぬ時代が來やう。それは眞摯な人々にまつて實に恐れるべきの日だ。もつこ眞面目に相聲のてい本を出すやうに心がくべきである。近時頗る

産婦から聞けばうれしい長屋中 美の作
産後ふと亭主も老けたなと思ひ 山雨樓
(産後の選後に)産後と云ふ題は、全く難か
しい題でした、出産の其の時を咏まれた句
も大分ありましたが、題意に添はぬと思つ
てすてました。又、産んだあきなら一年後
でも二年後でも産後に違ひはありますまい
が、「産後」と云ふ成語が持つ意味合ひは、
産の直後産褥にある頃、産褥を離れる頃位
を指し示すやふに自分は考へます。さう云
ふ解釋を根本にして句を選びました。選句
中特に、みの作氏の、「長屋中」の句は嬉し
い句でした、圓右の人情断を聞く様な氣が
しました、俳句でも短歌でもが咏へぬ、川
柳ならではの咏ひ得ぬ境地であると思ひます。
そんなのは古いと頭ごなしに云ふ人がある
かもしれませんが、私にさつては風馬耳のみ
であります。ぬかるみをあつちへさびこつ

寫 眞

雪の山こゝにも誰れか撮つた跡 源 坊
(佳)又一人産れた寫眞國へやり 督 坊
寫眞屋をくさす顔とは見ぬ 龜 珍
寫眞屋さあつて明るい二階なり 醉 郎
寫眞撮らうとで遂に年が暮れ 一 葉

ちへさびしたやうな形ばかり珍らしさうに、
新らしさうに咏まれて、盛られたる内容の
甚貧弱なる句はザラに見ます。小供は自分
が立派なものを持つてゐても、他人の持つ
てゐるものが珍らしく、立ちまさつて見へ
る爲に、自分のものを捨て、他人のものを
ほしがるものです。現代の川柳家と云ふ人
々が、自分の持つてゐるものゝ尊さが充分
分らないうちに、小供のやうに厭きが來て
他人のものを欲しがつてゐるやうな傾向は
ないでせうか……私は川柳家が、自分の寶
にもつと愛情をもつて、あわてずにジツと
もつと自分の寶を見まもつてほしいと思
ひます。……選後感がナト脱線いたしました
た、此の邊で本線へもどして、申譯計りの
軸吟を添へませう。

産の瘦せ乳だけ取つて付けたやう

(東魚生)

林田馬行選

はつきり撮れた緋の寫眞なり 志 郎
撮され上手なご新聞種になり 銀 燈
(佳)影一ツ是れが藝術寫眞なり のほろ
履歴書へ寫眞を添えたタイピスト 鮎 美
其寫眞抱だいて今は獨りなり 倒 嬬

高い定價の本を出すことが流行となつて
ゐるやうだが、これこそ身の知らずの
淺猿しい了見だ。幾らでも高く評價さへ
しておけばそれがいい本だなんて心得る
やうな人間は讀書子にはゐない。



ルービ黒ヒサア

ルービヒサア



川柳家の戸籍調べ

□ 係 馬 行 生

(一) 姓名 (二) 雅號 (三) 別號 (四) 現住所
 (五) 生年月日 (六) 職業 (七) 好きな句 (八) 好きなタイプの女 (九) 自信の句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配遇者の有無 (一二) 嫌ひなもの (一三) 川柳に手を染めた年月

(122) 森 東 魚

(一) 森榮 (二) 東魚 (三) 斗鏡、漂亭、(只酔テイ)云ふつもり (四) 東京下谷區花園町七(五) 明治廿二年三月廿八日生(六) 建築家云ふより先建築屋云ふ方(七) 暢びやかな明るい句(八) 眼は澄んだ賢いひらひきを持ち、眉は濃すぎず、額は廣い方、鼻はこがり過ぎず齒は奇麗でやい齒なさは寧ろ良い、是非顎から襟足の線が美しくあつてほしい。顔の輪廓は瓜だね云ふ所、全體の感じは生きく、さ明るくありたい。浮世繪の女としては烏文齋榮之の女、此頃だけいやに力を入れたものさ(九) ビールの泡参照(一〇) 俳句、繪畫、スポーツ、古書販賣あさり(一一) 有、子供男三人(一二) 風、會の幹事なごにされる事(一三) 明治三十七八年頃が活字になつた初め

(123) 廣 川 番 翁

(一) 廣川由藏 (二) 番翁 (三) 淑郎 (四) 神戸

厭落が着くゝ寫眞の尋ね人 白 郎
 雨の日に訪へば寫眞帖を見せ 耕 水
 (佳) 寫眞屋 なんじやいふと 濟み 夢 人
 若かりし寫眞にみいる老いた父 翠 峯
 知り顔も出て来る寫眞屋の見本 正 次
 卒業の寫眞を父母で探すなり 鶴 美
 母親のお下け時代の寫眞が出 聞 路
 痴和喧嘩もごをたゞせば古寫眞 芳 雪
 一枚の寫眞大事に若旦那 柳 造
 寫眞帳また思ひ出を繰り返し 一 文 字
 異國から寫眞になつて戻つて來 與 詩 夫
 赤ん坊の脇に慈愛の手が寫り 突 支 坊
 寫眞では補缺も選手程にそり 叙 久
 眞打の寫眞を木戸に浪花節 朱 唇 子
 友達の一人寫眞を矢鱈撮り 侶 之 助
 この中の一人は死んだ寫眞なり 千 鳥
 同窓會寫眞を撮つて別れたり 普 天
 自惚れもあつて焼増し頼んで來 光 路
 (佳) パレチノ 寫眞に眞似た髪と知れ 一 徹
 諒解の上バラソルを景に入れ 拔 天
 娘或る時は女優を眞似て撮り 天 花
 (佳) 道樂 カメラ 店を出し 利 劍 坊
 「毎日」も「朝日」も同じ寫眞なり 杏 三
 女優の寫眞集めるだけ。趣味と 晴 久
 (佳) 寫眞帖面白かつた遊び連れ い、年をし乍ら寫眞見て廻り 其 象
 團體の寫眞少うし無理が出来 村 句 茂
 憎みこそすれど寫眞は捨てられ 天 魂
 (佳) 手文庫の整理寫眞に暇が入り 鎌 月
 一着をうるさく圍む寫眞班 豆 蔓
 (佳) 戰勝の紀念寫眞は肩を組み 同
 暫くは逢へぬ寫眞と文が来る 眠 聲
 先代の寫眞も掛けて三味を教せ 同
 今度目の寫眞笑つて撮るつもり 山 雨 樓
 寫眞師はほくろ消さうかと思ひ 同
 一席の印畫道樂さは見ゆず 花 蝶
 アルバムの中の一枚見付け出し 同
 愛人の寫眞サロンに見當らぬ 毒 仙
 (佳) 妹の見たがる寫眞兄が持ち 同
 婦人記者寫眞を借りて用はずみ 大 夢 子
 (佳) 寫させて貰ふ寫眞は常着 同
 (佳) 右往左往撮しますと云は 同
 電氣撮り無意義な人につやり 萬 よし
 卒業式出世する氣の顔が撮れ 同
 (佳) 庭の草ひいても女優寫さ 同
 寫眞さは大分違ふ顔に老け 山 月
 今撮す後列の首長く伸び 同
 女學生寫眞見せたりかくしたり 同

(佳) 本堂の寫眞を見せて寄附の事 同
不孝者親の寫眞を怖く見る 柳 秀
(佳) 父は是れだくさ小指 同

髪 結

新岩 崎柳路 共選
田飯山

▽ 髪 結 柳 路 選
待つて居る間も髪結の櫛がけ 志 郎
耳隠し髪結さんも又違ひ 醉 郎
皮肉さは文金の横に忌中 鬻 坊
髪結へ亭主は留守の譯を云ひ 千 鳥
髪も結は母はメツキリ老けて よし久
妾宅へ來て髪結の暇がされ 與詩夫
髪結は要らない様に櫛を投り 大夢子
小道具を列べて姉は結び初め 利劍坊
耳寄の話髪結もつて來る 花 蝶
髪結の忙そがしそうな下駄の音 翠 峯
惚れて居る事を髪結知つて居り 耕 水
髪結のうしんで櫛をかき合せ 鮎 美
髪結は知る丈けの事みんな云ひ ひでを
髪結のからかわれてる若さなり のほろ
俳優の品定まつて髪が結へ 銀 燈

もの好きな嬌き寫眞師思へども 同
(佳) 絶景にカメラ一行から遅れ 同

髪結の眼にも大分蓄めて居る 萬よし
髪結の手に元結の強い事 山 月
髪結の目から男の意氣地なさ 同
髪結へ使を立てる用が出来 柳 秀
髪結のうっかり下駄を穿き違へ 同
エプロンへ巻いて髪結歸るなり 天 花
髪結で聞いた通りに腹を立て 同
三越へ一日早い髪が出来 光 路
縁談が出来た桃割れ結うて居る 同
(佳) 髪結の裾の方だけ硝子越し 豆 蔓
(佳) 追ひ廻す様に梳子の後を行き 一文子
(佳) 髪結を笑わして居るい亭主 萬よし
(佳) 結び振りを賞めて髪結の名も尋ね 拔 天
(佳) 明日歸る日に結わせても旅の宿 普 天
(佳) 座敷中一ぱいになり髪を結び 山 月
(佳) 髪結はわいら喧嘩を見て歸り 山雨樓
(佳) 髪結は道頓堀を斜にそれ 同

市西出町一五六(五)明治三十年二月二十
七日生(八)會社員七(一)咳一つ聞ぬぬ中
を天皇旗「午後三時永田町から花が降
り」「拘られたさ知らず喧嘩に勝つてゐ
る」「猿に似て秀吉に似た人は出す」等限
りなし(八)憂ひのある方が好し、面長、
背高き方(九)娘の友が歸り病室窓に暮
れ、之れさても後になれば何んとも計り
難し(一〇)撞球、薩摩琵琶、野球、庭球
(運動一切)(一一)有男兒二人(一二)
我儘者、コソ付く者 老人(一三)大正二
年二月頃郷里神奈川縣に居りし頃より、
(一三) 齋藤利劍坊

(一) 齋藤康繁(二) 利劍坊(三) 別になし
(四) 福島縣東白川郡柳倉町字北町一〇二
(五) 明治十九年十月三日生(六) 藥劑師
(七) 路郎氏の句其他葵豆、馬行、刀三、
半文銭、故柳珍堂、水府の諸氏に共鳴
の句あり(八) 別段ありません(九) 至つて
初心者ですから目下のさう云ひ兼ねま
す。(一〇) 書畫骨董觀賞、園藝、盆栽に
趣味あり、スポーツここに野球なら三度
の飯を二度にして、もさ云ふ熱球家です
(一一) 隠し藝、唄や、義太夫、浪花節、
映畫は滅多に見ません(一二) 中學生二人
と女學生一人のお父さん(一三) 大正十五
年二月萬朝報柳壇へ投稿したのが處女吟
だったさ覺て居ます。

(一六) 安井ひろし

(佳)よく流行る髪結きんむすの置炬燵おきこ 市郎
 (人)その軒へ髪結何か印つけ 柳秀
 (人)小走りに髪結の行く冬の街 突支坊
 (地)髪結のもう一軒に午砲がなり 其象
 (天)元結もとむす締つたさで飯が吹き 光路

軸 吟

白粉をつけて髪結久し振り 柳路
 梳子くしもう髪結で見たいなと思ひ 同

▽ 飯 山 選

髪結の敷島一本美味さうに ひでを
 髪結で又はじまつた百々之助 豆蔓
 髪結はこゝの主人の性を知り 一文字
 お師匠の來て下流の咄切れ 花蝶
 エプロンへ巻いて髪結歸るなり 天花
 小走りに髪結の行く冬の街 突支坊
 髪結に隣のうはさ聞かされる 耕水
 髪結へ妾旦那の好きを言ひ 鮎美
 髪結も南風が好きさ如才なし 眠聲
 妾宅へ來て髪結のひまがこれ 與詩夫
 ご主人が歸り髪結押黙り 其象
 髪結が來たのでく子頂けられ 利劍坊
 花嫁の來て髪結の靜かなり 醉郎
 髪結の亭主火鉢の隅にゐる よし久

髪結の亭主あるはきいただけ 柳造
 髪結の続くうち少し眠うなり 源坊
 髪結は世間話で一つ結び 翠峰
 また一つほめて髪結梳きはじめ 抜天
 内密ださ笑ひ髪結軒から出 朱唇子
 睦じいさこも髪結見てかへり 光路
 髪結の手に元結の強いこゝ 山月
 髪結は髪かみの長さをほめて梳き 千鳥
 髪結は別な心で結うてのけ 志郎
 髪結はよく流行る髪結きんむすの置炬燵おきこ 市郎
 裾へ來たテマリ髪結拾てやり 同
 髪結は奥で碁石の音をきき 山雨樓
 髪結はひさい薄毛だなと思ひ 同
 髪結を笑はせてゐるいゝ亭主 萬よし
 ご亭主の不足に髪結さからはず 同
 公休日髪結コートにて出かけ 同
 髪結の世辭も目出度い中へき 同
 髪結のからかはれてる若さなり 同
 髪結に理想の人が見つからず 同
 髪結のうつかり下駄をはきちがへ 柳秀
 京染へ髪結ちつこ口がすぎ 同
 よくうつりますが髪結口につき 同
 晴の髪結うて髪結腰をのし 同

(一)神前結婚のとき祝詞でよみあげた名は安井里吉、十五で夭折した天才的詩人の叔父の名だそうです。一昨年から哲名學上から安井實三改名通稱してをります(二)ひろし(三)呂牛(四)大阪市南區安堂寺橋通り四丁目卅七五明治廿九年十月十一日生(但し通稱廿六才と自惚れて居る)(五)齒ブラシ卸業、たのまれて美術雜誌中央美術社の仕事もする(七)大平洋に面して僕は馬鹿でした(八)物に好意を持つてくれる女はみんな好きですが、ぜいたくに好みを云へば少しやゝこしいがノーブルなモダンガールの色彩をもちクラシツクな高級的趣味に生き流行に超越して居る女、東京の山の手のお嬢さんさでも申しませうか(九)足袋ぬけばもう秋の夜の聲(一〇)俳句、愚談野球見物、將棋(將棋手合せ御希望の向きは夜分御來黨あれ(一一)戀に興味をもちこれに没頭する事十數年、然し一昨冬選りカスのワイフを得てすつかり禁足で體です(十二)食ふものならなんでもよくです。均整のされたものならなんでもよろしい、その反對のものに不快を感じる(十三)大正九年四月八日大阪日日柳壇の柳珍堂選に游魚氏にすゝめられて投じろ牛三して四句程のつたぎり作らず、中絶昨年の春、雜誌「苦樂」の川柳に入選して大いに自信を得、以來病みつきなる。

安心の姿に海が風いでゐる。教太
日本を繞つて風があるかな。同
風靜かに満燈飾を撫でて行く。同
海上風靜かに船頭寝てゐる。同

仁川川柳社新年句會

二月八日午後四時

久し振りに正月の會をやらうか云ふ間も
あらせす柳葉子が句會の案内を印刷して來
る。

そして今日壹月八日午後四時から牛頭子居
の奥の間に開く事にした。定時の四時にな
るも連中は七八人より揃はない。其中の牛十
貴、などは此頃留ひかけた將棋に夢中。兎角
してゐる内に集まつた人々は、牛頭子、右大
臣、紅短冊、柳葉子、春郎、貴公子、十郎兵衛
流坊、華化露、木堂、化室、靜の男、雨の介、山
鳥子、八郎(名簿から)の十五名宿題「靜」互選
席題冬の街「靜の男選」紅短冊選「二
日酔」右大臣選の被講がなごやか氣持の中
で、拍手の内に終る。雨の介、流坊、右大臣
の順に十等迄賞を呈して、七時から例の小宴
に席を改める。常連ばかりの久し振りの會合
さてみな喜ぶ事限りない。
近い内又はじめやうせと云つて別れたのは
かなり更けてからであつた(右大臣)

宿題「靜」互選

口論が靜になつて無氣味なり。化室
噓をつく事を靜かに考へる。木堂
靜寂は鼠一匹から破れ。紅短冊

諒闇の年始も來づに三ヶ日
船唄も聞こへて沖の靜かなり
絹つれの着のみ闇を渡るやう
靜々き陽脚自亞を染めて伸び
脱帽に満場水を打つたやう
靜かだと思へば勉強眠つてゐる
立ち昇る煙靜けさの軒を這ふ
アスハルトもう朝の氣に蘇るへり
兒の寢顔靜かに母の手が裁け
背の兒が靜になつて重くなり

席題「冬の街」靜の男選

(佳)目落ちて足跡亂れたま凍り
(佳)笑つてゐる奴も轉んだ冬の街
(佳)冬の街明るくモダンガール行
(人)冬を賑はれてハットライト塔へ
(地)複雑な頭が歩む暮の街
(地)冬の街誰か後をつけるやう
(軸)死の如く冬の街路の夜に更ける

席題「坂道」紅短冊選

(佳)坂道に速度に巡查手を舉げる
(佳)坂道に誰かすべつたらしい跡
(佳)坂重く馬砂を吹き砂を吹き
(人)空車坂を下つた音になり
(地)坂道を牛叩かれる丈け登り
(天)かけ聲を異へて車坂になり

席題「二日酔」右大臣選

(佳)風呂へ來て鉢巻を取る二日酔
(佳)鉢巻のまゝ飲みなす二日酔
(人)二日酔昨夜の粗忽詫びて飲み

(地)二日酔昨夜の顔と思はれず
(天)二日酔別な顔みもつて起き
(軸)二日酔何に思ひけん立ち上り
川柳 山口句會
雜誌 吐露樓報

一月三日昭和初句會を洲馬庵に開く

諒闇

をさなしくせよ喪章をつけてやり
諒闇は打ちしめりたる日がつゞき
羽根をつくり子に喪章の暗、座
諒闇の街を無言で記者と記者
紋付をたゝんだまのお正月
椅子、溜息、缺損

パアの椅子少うし酔ふさこけかり
溜息を長い手紙に封じ込み
財界の不況と備考欄に書き
缺損がつゞき女給を一人減し
溜息に炬燵を圍ひ顔と顔
藤崎子に宛れたまな呼びつける
高利貸缺損などへ目もくれず
彼は椅子僕を直立不動なく
差引の不足を示す赤インキ
背伸して退席の椅子をはなれ
藤崎子に太平洋を寢て見
欠損の屋根にペン草が生
女給の溜息強ひらる、戀
受付へ呼ばれぬ迄の椅子にかけ
父兄會子供の椅子をなつかし

總代に椅子の足らない嘆願書 華櫻夫
簡單に椅子を攝つて輕業師 八百長
濯息に決心をする日が迫り 蛙人

萬よし偶會 (一) (十二月廿日)

注射にも馴れて近頃本を讀み 鮎美
注射して過去を悔ひてるばかりなり 同
母の持病へ注射の効かず 冷笑
注射ふさ顔をしめたとげの事 同
モヒ注射今日も貰ひを勘定し 眠聲
醫者曰く注射でもすりやすものゝ 同
注射する脇に二親眼をつむり 萬よし
絶望へ母は注射を主張する 同

(二) (十二月廿九日)

刺箸はボツキリ口で割られけり 岩崎
支那料理師は先からいやになり 享三
支那料理女に少しまづいなり 同
オライと言はればならぬ支那料理 彌彌
刺箸にうごんが辛い札所なり 萬よし
支那料理無暗に赤い紙を張り 同
無遠慮に支那料理の愛想よし 同
芝居裏さつくばらんに押上げる 同

(三) (一月一日)

裾模様悉皆屋の氣が長い 三笑
裾模様母娘より氣が若い 同
コンパクト鑑か持った裾模様 同
染直し年を忘れてたゝんでる 風作
裾模様嬉ぶものに母があり 同
裾模様そでで食ふても知らぬ顔 同
ひき祝ひいつものやうな氣で居れず 同

かゝる始めるまでにはきつち裾模様 萬よし
裾模様辻を曲るさ青伸びする 同

梅田一月小集

(鮎美報)

炬燵から火が出た記事を妻に見せ 鮎美
勘當がゆりて炬燵で話し合ひ 同
外は雪炬燵で話はずんで居 同
爪彈きの姿炬燵の日の永き 同
炬燵から見る雪解けの快さ 同
うたゝ寝を炬燵へつてゆく重さ 同
竹のおれるのを炬燵の中できく 同
はりかへた炬燵に母の日向ぼこ 同
春雨の音を炬燵に讀みふけり 冷笑
火の消へた炬燵夜中に目なさまし 同
小説が映畫化されて母と見る 鮎美
小説の前編「悪」が榮て居 同
泣くせに母小説を聞きながら 同
針を持つ母に小説讀んでやり 同
小説が好きを娘を信じかれ 同
小説が生んだいたずら大さき 同
小説は小説として身にくらべ 同
小説を讀めば悲しき病上り 同
沸いてゐるのを小説はまだ知らず 同
小説は涙をさそふものに書き 同
買ふてまで小説本を食してやり 同
戀愛小説のペーシが進み 同
髭のびてゐる車掌づばらにも見 同
令嬢へ車掌ぶつきら棒に云ひ 同
車掌とは見へぬ男に金があり 同
正朝をわけば車掌の分けてゐる 同

やなぎ正月小集會 (一月十日)

亡き友の日記に哀れますばかり 桃哉
日記帳雑煮の餅の数も書き 同
泣かされた事は日記に書いて無し 同
決心も正月だけの日記帳 同
日記帳餘白が續き恙なし 同
日記帳すら書いて戀もなし 同
日記を書けば罪がかくせず 同
あの頃の生き甲斐ありと日記見る 同
當分は日記を二冊並べてる 同
また嘘をついたと思ふ日記帳 同
日記帳にその日の引きつられ 同
妹の日記のぞいて叱られる 同
同情を求める様に座つてゐる 同
同縣を聞いて同情あらたまり 同
同情を買はんさしこしてる空涙 同
そういつとも同情ばかり出来ません 同
同情をさけつゝ瘦せて行くペット 同
ウエスターの一人同情眼を向ける 同
慰める言葉もなく立ちつくし 同
同情も良いが男をすたらせる 同
同情は同病なるが故深し 同
金はなくとも一掬の涙あり 同
それさなと同情するも女なり 同
同情はたゞ沈黙をするばかり 同

同情の百圓也な太く書き同
しんみりと同情されて涙ぐみ同

糸屋町より (一月三日)

於舟々居

兎狩り追かけ廻つたばかりなり 讀昌
射た兎自慢を添へて人にやり
兎狩り追あげて見れば網はでる 榮次郎
馬鹿を見た兎日向を怨んでる 舟々
耳だけを付けた兎の幼稚園 同
生命を頼む耳をばさげあるき 翠峯
射ち止めた兎が染めた雪の跡 白嶺
兎狩り鍋に兎のかざもせず 毒仙

回覽誌の話

近ごろ松郎の肝煎で川柳の回覽誌が出来た。その第一回は案外好成績で、年末に僕の手元へ總評をしてくれと云つてかつぎこまれた。一通り読んでこれと思ふ句に批評をしてかへした。それを又會員へ再度回覽して作句の研究をつづけてゐる。この回覽誌は十數年前までは、かなり盛であつたが、だん／＼不忠實な人が混じつて回覽を遅らしたり、又送附中に紛失せたりして、遂に幹事が勞に堪へなくなり、全く中絶の形となつてしまつた。六厘坊や青明が生きてゐるころには五句集又は一句集を稱して随分熱心にこの回覽誌を出したものである。それ等の句集

聊きの傍に兎の長い耳 同
つくねと立てば巡査の役もすみ 翠峯
この邊に居るのが巡査やギなさげ 毒仙
騎馬巡査家へかへれば馬さなり 舟々
あご掛けの巡査に何かあるらしい 同

回覽誌稿 (第一回)

暫くは時計の音に耳を貸し 十字路
お前さへ承知ならば父老ひひぬ 三笑
不平もう高笑ひではすまぬ程 萬よし
洋食へ一人がするこそその通り 川洞
ストープのよく燃てたど一人 ひろし
居たさいふ落書をして土さなり 案山子
お喋べりがあつて近所のもめてゐる 彩秋

は死んだ柳珍堂や今信州にひきこもつてゐる百樹氏なども加入してゐたことを覺てゐる。幸ひ松郎がその煩を厭はずに若い人達のために回覽誌を思ひ立つて世話をしてゐるのであるから出来るだけ應募されたと思ふ。回覽誌に出す句はなるべく平凡な句は避けたがいと思ふ。自分は佳句だと思ふが他人の意見はどうあらうと思はれるやうな句を出されるのがよからうと思ふ。自分では相當いい句だ、信じてゐても、第三者は樂々とその句の缺點を指摘してくれるものであるからである。それから他人の句の批評を讀んでみると、自分の句の内容を全然自分と違つた親方で観てゐる場合がありその句はごちらにでも意味がされること

沈黙へ／＼怒氣あらくなり 悟郎
中巻は本ばかり見て寝てゐる 鮎美
緋でも緋でも似合ふうちの人 冷笑
秀才や才媛のみで物足らず 久郎
妻のおるか金鹽のひびくこと 二柳子
秋深し十五貫五百に一寸切れ 眠聲
おちさんにはれて／＼お菓子を買 文久
みる眼にはあまりに痛いきりスト 馬行
そんならさ金のかゝらぬ方に決め 松郎
憂鬱の眼先へ立つた主人の子 松郎

◎次回 回覽誌投句を募る

締切二月十五日

自信ある創作一句、松郎宛送付の事

を知つて大いに教えられる點のあるものである。この點から見ても回覽誌は非常に句作上の参考になるものである。

常に他人の句を觀てゐて、いゝとか悪るいとかいふことは出来るが、さてどの點が悪るいかなるさ、それを充分指摘しなればならぬので句の組立てがいふものなハツキ／＼凝視することが出る得があるのである。こうした苦心をしなければ決して句が漫然さうまくなるものではないのである。兎に角回覽誌が出来たので一句投じて見給ふへ。がてその回覽誌が諸君の机上に届くであらう。その興味といふものはなが／＼に忘れがたいものである。(略)

編輯室から 遅日社主人

▼新春特別號は内容充實でウツと光った。あらゆる短詩型の雑誌の中へ突き出して、ハンディキャップなしに伍して行けることだけは確だといふ評判だ。もうこれ以上云ふ必要はあるまい。まず「稗を堅くしめること」▼新春號の發送を終つたのは十二月の廿四日の晩だつた。そして翌廿五日の午前一時廿五分には大正天皇がおかれになつた。私達赤子はすべて聲をのんだ。なんだか氣拔けのしたありさまで、諒闇の春を迎へることは迎へたが、まったく勝手が違つたお正月であつた。木綿着のまゝで終日家にゐた。▼二月號は豫告の通り前出重氏と、小出楢重氏から素派らしい原稿をいたゞいた。私も初心者本位「柳傳評稿廿四篇まで」を書いた。これは相當續けて書くつもりだ。御愛讀を願ひたい。▼次に同人の異同を申上げる。藤里藤園君が昭和元年に入社したので、本誌創刊について大いに盡力してくれ、その後盛んに奮つてゐた太田徹底郎君が、家庭の事情上止むを得ず退社することになつた。同君のために健康と復讐を祈つてゐる。▼豫て發表しておいた川柳歌句祭は先帝崩御のため御遠慮中止することになつたので、早速京阪神の出席されさうな方々や、各地の柳社へは天満宮社報の號外で御通知にかへたが、御通知洩れの方で無駄足を踏まれた方は不潔おゆ

るしを願ひたい。▼一月七日に諒闇第一の句會を開き、歌句祭で講演する筈になつてゐた「川柳家の眼」を話した。ヤレ／＼助つたと思つてゐたのに、突然喋べられたので面くらつたが幸に謹懃されたので感謝してゐる。▼同人の美の作は七日に次男を擧げた。これで駒井家が盤石の固きにあるといふもの、さりあへず誇上およるこひを申述べる。御當人は風邪をひいて弱つてゐるさうであるが小生も風邪をひく方にかけては、決して人後に落ちないで誠になさけない。目下引籠中である。▼同人馬行は十五日に芽出度華燭の典をあげた。十七日から相携へて山陰地方へこのそり旅に出た。寒いので閉口だ。松江からのたより、二人で出かけて寒いなどは嘘つけである。まあなんと云つても馬行の身がたればお母さんが一番よろこばれるだらう。▼旅さへば小生も、四日ム日伊勢路と鳥羽の對神館で暮らして来た。同人の卯之助に誘はれたのだ。藤園も一緒だつた。▼仁川同人の右大臣は、湯温湯泉で三ヶ月をくらしたさうである。ひそかに懐のあたたかさをはめかして来るので、小生などはいつても羨まじがる役廻りに廻られる。▼同人萬よしは元旦早々家族同伴で比叡登山。十五日には鳴尾グラウンドをうならすさうであるが附近に住んでゐるといつ、ボールが飛來するから分らぬので危険々々。▼同人放馬はこれから大いに奮闘するさうである。しかしこれはその豫告。▼函館同人の花童子は十日に大阪の浪花坊氏の突然の來訪をうけて驚いたとい

つて湯の川温泉から頼りに寄越した。雪の北海道は是非自分も知りたいと思ふ。▼同人胸人は胃腸を病んで、ぐみにて氣がないうてゐる。慰めてやつて下さい。▼神戸のK氏が各社の臺所調べき題し「川柳雜誌」を和洋混合ライスカレーに「番傘」を汁粉に見立てた漫画が描いた。一寸面白いで載せやうと思つたが、出版にするのに文字がうまくわがれたので中止した。諒さされた。▼同人ひろしの夫人欣女が病氣、岳父の永眠全く不幸続きで同情に絶ない。▼朝鮮の姪子香二氏は今春は來阪されるさうである。大に期待してゐる。▼川村花菱氏は新春早々芝居のこゝで大阪神戸へ來られた筈であつたが多忙だつた。見えへて寄られなかつた。それでも同人では美の作を訪れ、北陸に飛んで久流美氏を訪れてゐる。▼雀郎、三太郎、鈴子、しげを、不倒人、○丸太、丸、諸氏熱海から遠く飛べない小生を羨まがらすこと限りなのである。▼森東魚氏の嚴父雪雅翁が一月五日に七十二歳の高齡で亡くなられました。お悼み申上げます。▼關東川柳聯盟から改元を機として「昭和川柳」が創刊されるさうです。事務所は東京市四谷區寺町六です。▼改元と共に「大正川柳」は「川柳人」と改題されました。▼川上日車氏は近江國八幡町間の町二番地へ移居。▼追藤二葉里君（鋼茶川柳社事務所）は京城府本町五丁目七六地へ轉居。▼魚崎桃太郎君は、大阪市港區市岡町六二二三へ轉居。▲本號も又々私が、風邪でへたばつたので鳴尾松郎と小生とで編輯した。

投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記する。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記する。

▼締切は厳守されたし。

▼各地會報は清記のこ。

▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこ。

募 集

第四卷第四號課題

二月十日締切
(各題二十句以内)

▼疊 前田 雀 郎選
▼鏡 麻生 霞 乃選
▼靴 住 夢 遊 共選
橋本 二柳子

第四卷第五號課題

三月十日締切
(各題二十句以内)

▼鳥 井上 劍 花坊選
▼蕪 塚 崎 松 郎選
▼豆腐屋 關本 雅 幽 共選
岩崎 柳路

每 號 募 集

▼近作柳樹三十句以内 麻生路郎選
▼各地柳實(會報) 塚崎松郎編
▼文章(評論研究吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

價 定

一部 參拾錢(郵)
六部 壹圓六拾錢(郵)
十二部 參圓(共稅郵)

料 告 廣

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は郵便口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも預ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和二年一月廿五日印刷

昭和二年二月一日發行

第四卷第貳號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸 二 郎
發行所 兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地
川柳雜誌社
振替大阪三五一四番

大阪市港區八條通二丁目十二番地

川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇番

店 書 攤 賣

(大阪) 明文堂 公立社 柳屋 岳文堂 和正堂
(東京) 仲見世 玉森堂 (神戸) 米田 後藤
(金澤) 石井 (函館) 石塚 (廣島) 金星堂

婦女世界

毎月一回發行
定價 六拾錢
郵税 四拾錢

關西唯一の婦人雜誌として定評のあるものです。記事は他の婦人雜誌と趣を異にした實生活に觸れた新しいものばかりです。口繪寫眞は毎號三十數葉を入れてあります。

令嬢畫報

定價 壹圓八拾錢
郵税 拾貳錢

「令嬢畫報」はお嫁入りの必需品であることをお忘れになりませんやうに。そしていつも好評で、すぐ賣切れになりますから愛讀者の方は直接本社へ御申込み下さいませ申込順に御送り申し上げます。

結婚調査

秘密 嚴守
調査 正確
匿名御依頼に應ず

人生の大事先方を調べぬと、さんだ失敗を招きます。縁談が持上りましたら是非親切で速い本社結婚調査部を御利用下さい。

大阪市北區堂島中一丁目

婦女世界社

電話北五五八番
振替大阪四〇一〇二番

東京市京橋區宗十郎町一
國文社ビルヂング内

婦女世界社東京局

電話銀座一八八六番
振替東京四〇三二三番

古屋夢村編

影像句集

四六版洋
金文字入美裝
定價 壹圓二十錢
郵税 拾錢
頁數 二〇〇頁

昭和二年一月盡日上梓豫定

本句集は影像創刊號より三十四號迄即ち大正十二年十月より大正十五年十二月に至る約三箇年餘柳壇新舊兩派の論争最も激烈であつた半面に於て生れた創作約壹萬六千句より抜摘した作品を載せたものであつて句主は廣く全國に亘り而も其句主はそれぞれ其地方の主なる作家であつたといふことゝ、影像管て柳壇に阿らず、敢て誌友の歡心を買はず獨立孤行、志向一徹信する正道に向つて奮闘努力した事實の上から觀ても、此の句集の各章は新與川柳中の代表作品だと言ふことが出來やう。(序文の一節)

發行所 影像社

廣島市臺星町八一番地

雙木園主人編述

布製美裝函入菊版 五〇〇頁
原 畫 挿 入 數 十 葉
定價 參 圓 八 拾 錢
送料 拾 八 錢

江戸時代戯曲と後通史

本書が江戸時代の戯曲及小説の研究家によつて、如何に珍寶であるかは次の項を一讀されただけでも充分であらう。

一、本書は江戸時代の戯曲(淨瑠璃本、演劇脚本)とはどんなものか、小説(浮世草子、洒落本、人情本、草雙紙、實録物、讀本、滑稽本)とは、どんなものかといふことを何人にも理解し得られるやう類例をかゝけてその一斑を傳へてゐる。

一、本書は江戸時代のあらゆる戯曲家、小説家の紀傳を、その著述目錄を掲出して徳川三百年間の文藝の趨勢を一目瞭然たらしめてゐる。

一、本書の編末には、江戸時代の戯曲家、小説家の生歿年表をかゝけ、更にその著述の刊行より此等に關係ある主要なる事歴をも記してゐる。又或る一の傳紀を知らんとするものためにはイロハ索引をも附してある。

一、本書は絶版となつてから幾多の歲月が流れてゐるので、今日これが市價は本書・定價の約三倍にさへ暴騰してゐるが、それさへ手に入れることが甚だ困難である。本書の復活は斯道研究家は勿論、一般讀書家に至つても非常なよろこびでなければならぬ。本書は頗る美装を凝らして再び世に出たが、その内容に至つては原本に少しの改竄をも加へてゐないことを誇りとする。

絶版は斯くして蘇る!

弘文社

東京市下谷區御徒町二丁目九十番地
大阪東區後備町一丁目三番地

發行所

讀書子に告ぐ

今のやうにあさから／＼新刊が出るゝ新刊を一々讀破することは容易ではない。たゞへ新本を買つてもいよく讀むころになれば、もう古本で至極新らしい本が出てゐる。こうなればわざ／＼新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新らしい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にまつては、誠にありがたしい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば、幾冊か求めらうちに幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたなら決して損の無いことかわからう。

(路郎生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

清 酒

白鶴を別荘で飲み宅で飲み
酌をする度に白鶴頂かれ
よろこびに添へて白鶴届けさき

...◆...

これ丈はねご白鶴に生きてゐる
白鶴をいつもきらさぬくらしむき
白鶴の方に幹事は極めちまい



灘 津 攝

嘉納合名社會釀



非常に愉快に聞ける

貝印内外

レコード

家庭の喜びは

このレコードから！

一枚は一枚づつ、

笑ひが漲ぎる

レコードの花形！

合資會社 内外蓄音器商會

